

山旅文化の地域差

——外国と日本のトレッキング環境を考える

進藤賢一

はじめに

外国の山を歩いていると日本には見られない幾つもの特徴があるように思われる。外国といっても新興国と先進国の山旅事情は異なるし、先進国でも自然環境に対する国家や自然保護団体の考え方、山旅の条件維持に必要な財政力出動によって山歩きの仕方や方法にも違いが出てくる。

日本国内をみると地域による山岳環境維持への取り組みは異なるし、山環境を護る基本軸でも行政と自然保護団体とは矛盾があるように見える。古い時代の山旅と最新の登山事情はかなり違ってきているし、最近の山旅方式にはこれまでになかった傾向も見受けられる。時代の進歩は登山装備の著しい近代化をもたらし、また自動車道路の整備やロープウェイ、ケーブルカーなどの敷設は山旅の簡略化、効率化、歩く時間の短縮化を可能にしている。

日本では、山岳部・山岳会・ワンダーフォーゲル部など、高校、大学、企業のグループ登山や若い人たちの個人登山が盛んな時代もあったが最近の山旅傾向は中高年層の比率が高く、若年層登山客は減少傾向にある。諸外国では必ずしも山行が中高年層に限定しているわけではない。日本とは異なって若者達で賑っている地域や国々もある。特にアメリカのロッキー山脈やワサッチ山脈などはそうした傾向が強い。日本では高校や大学の山岳部が部員不足で閉鎖に追い込まれたり、活動休止状態にある例も多い。登山に限らずクロスカン트리ースキーやノルディックウォーキングなど自然と親しむ機会の獲得も欧米や豪州に比較して日本では若者、青少年層人口が少ないことが指摘されている。

また中高年層の登山様式も軽装で背負う荷物も少なく、山小屋、避難小屋などをねぐらとしている場合が多いから、山岳事情を安易に考えられがちだ。ガイド付き登山形式も増えて、ガイドに頼りすぎ登山者自らが山の地形や地質、

植生や動物分布と生態、気象の季節的变化などを詳しく学習しない傾向が出てきた。持ち物の基本原則を知らないなどの欠陥が露呈され遭難との因果関係が指摘されている。

連泊の場合はガイドや若干のポーターが食材、宿泊機材など多くを運び、登山客は軽装の簡易登山が急速に浸透している。これは人件費の安い新興国には見られる現象だが、人件費のかさむ先進国のなかでは珍しいと言えるのではないか。

本州では北、中央、南アルプスをはじめ、多くの山々は適当に配置された山小屋で寝具と食事が提供され、下界で言う旅館並の宿泊費が請求される。食材は強力^{ゴクリキ}によって運ばれる場合もあるが、ヘリコプターなどでの輸送量も増えている。

北海道の山小屋は基本的に避難小屋の性格を有しており、寝具や食材は持参しなければならない。管理人の在否も季節性が強く、夏季の登山シーズンでもいたり、いなかったりだ。札幌近郊の山々では北大、北海学園大、東海大など大学山岳部が運営管理している山小屋もあるが、夏季間のみ臨時の管理人（主に山岳部員）が置かれている。

山旅はいわゆるワンデイハイクを除けば衣食住材をコンパクトな荷としてリュックザックに詰め込み、山中を歩く行為であるから山での気象変化に厳しい対応と行動がとられる筈である。最も合理的な方法で荷をザックに詰め込み、運搬する容量は最小にして、最軽量でなければならない。とはいえ長期間の縦走となれば食材など重量は増してくる。どんな食材を準備し、運搬するのか、外国人と日本人の山旅文化、特に慣習や取り組み方法の違いは何か、興味を持ち続けていた。

強風と風雨、降雪と降霜対策、雪渓や湿原、急崖や藪漕ぎ、川の渡渉や雪山歩行など山岳地形や気象の季節性など考慮した歩行を楽しむためには、事前に山岳条件や環境状況を十分把握する必要がある。地図やカメラ、標高計やコンパスの利用できるように日頃訓練しておかなければならない。

アメリカやアフリカ、ヒマラヤやニュージーランドの山々を歩いてみると、日本と海外の山旅には大きな違いがある。何がどのように違うのか、日本の登山環境はどのようにすればいいのか、アメリカのロッキー山脈とニュージーランド南西部フィオールドランドやエイベル・タズマンの先進国型山旅とヒマラヤ山脈やアフリカのキリマンジャロ山など新興国の山旅に見られる文化的相違の

地域差を考えながら山旅文化のあり方を探してみたい。

I ワイオミング・ロッキー山脈を歩く

1) ウィンドリバー (WR) 山系の山旅

まずは先進国型の代表例、アメリカのロッキー山脈を取り上げよう。

2009年1月、アメリカユタ大名誉教授の加地幸雄からワイオミングロッキー・ウィンドリバー山系山行の詳細が書かれた資料と参加依頼が届いた。

ウィンドリバー（風水）山系はアメリカロッキーのほぼ中央、ワイオミング州を北から南に走る背骨部分で、太平洋とカリブ海に注ぐ諸河川の大分水嶺になっている。

北にはティートン国立公園、イエローストーン国立公園が、南にはコロラドロッキーが繋がる山嶺を形成している。ウィンドリバー山系の最高峰は標高4183mのガネット山。

8月下旬ロッキー山脈のなかでも最も美しいとされるこのWR山系で歩行高度はおおよそ標高3000m～4000m、8月の気温は日中20度を超えることもあるが夜は降雪、降霜に見舞われる。9日間の山旅だが1日8kmから16km程度の山岳歩行。背負う荷物は個人、共用合わせて15～25kgで共用はおもに食材、鍋やフライパン、コンロと燃料、熊よけのカニスター（頑丈なジュラルミン缶）などである。個人用装備はテント、寝袋、衣類、おやつ類、水筒2リットル、その他山岳必需品など。

私にはロッキー山脈の支脈、ワサッチ山系（標高3000～3500m）は6～7回山行経験があるが、9日間の長期縦走は初めてだ。キリマンジャロやヒマラヤのような新興国の山は労賃が安く、ガイドやポーター、時にはコックも雇った登山が普通であるし、先進国でもニュージーランドの各トラックや日本の山小屋（北海道は除く）ように宿泊施設、食事など完璧に整ったなかでの軽装登山が出来る地域もある。

しかし、アメリカのウィンドリバー山系は、山中に一切こうした施設はないし、食の提供もされない。全ては登山者の背で運んで行かなくてはならない。古くからの山行形式で魅力は尽きないがリスクも決して少なくない。

病気や怪めで同行のメンバーに迷惑がかかる行為がおこらないか、3～4日目に体調を崩し引き返すとなればどんな状況になるか、果たしてエスケープルー

トはあるのか。山岳条件の違いから装備品に新たなものを加える必要があるか、様々な疑問が湧いてくる。何よりもここ数年ワンデイハイク程度の登山に甘んじていたことによる落ちた体力をどのように回復するか、それが鍵になる。

取り敢えず返事を先送りし、体力養成のトレーニングを3カ月前から開始した。大事なことは重い荷を背負って長時間歩く訓練だ。これは札幌近郊の山で十分出来る。宿泊訓練も大雪山や羊蹄山などで可能だ。だが高度順応は富士山や日本アルプスでなければできない。朝日新聞記者の遊佐武は、伊仏国境のモンブラン(4808m)登頂訓練として富士山登山で繰り返し、高度順応を行った。また元カーレーサー片山右京は南極最高峰ビンソンマシフ登頂訓練として12月の富士山を選んだが仲間2人の遭難死を招いた。山行の訓練は、山で行うのが最も効率的であるが危険も付きまとう。

準備段階で様々な問題が出てきた。いままで長年使っていたリュックザック(60リットルと70リットル)が小さいこと、体にしっかりフィットしていないことが分かった。また、7月に大雪山登山中10人(団体で8人)が凍死した事件の教訓もあり、寒さ対策が重要なことも認識し、アンダーウェアやダウンを買い足す必要も出てきた。避難小屋には泊まらずテント泊を繰り返して縦走への訓練を積んでみた。加齢という厳しい条件はあるが、20kg前後の荷を背負い、1日10km~20km程度の山歩きは可能であることがわかってきた。

72歳の体は順調に仕上がりに、コンディションも悪くないので8月下旬のロッキー山行1カ月前、直接カリフォルニア州在住の登山ガイド、メリンダ・グッドウォーターに必要なすべての経費150ドルを添えてエントリーを済ませた。8泊9日の日程の総費用が1.4万円(1ドル90円)も信じられない安さだ。この段階で私と加地幸雄以外の参加者年齢や職種などもわからない。私以外参加者は全てアメリカ人だが、彼らの体力や山行経験が気がかりだった。

ウィンドリバー(WR)登山要項によると、「熊の耳」コース、「リザードヘッド」コースと呼ばれる山道を歩いて景勝地「サークオブタワーズ」(塔が馬蹄形に林立する鋭鋒に囲まれたロンサム湖畔に2泊)と花崗岩盤の鋭角に切り立つ山々とそれに囲まれた湖を巡る「ビッグサンディレイク」(2泊)周辺のループコース、風水山系とある。加地幸雄は昨年コースの一部を使った山行に、今回のリーダー・メリンダ等と参加し「白眉の世界」と絶賛し、絶好のチャンスだから是非参加するよう薦められた。

結局、最終の高度順応訓練を富士山や北アルプスで行う計画は、お盆前後の

登山客で混み合う時節と重なったため、早めにアメリカに行き、ユタ州のワサッチ山脈で行うことに変更した。

ソルトレークシティに近いリトルコットンウッドの最奥地アルピオン盆地（標高2851m）からウオーバリン山（3564m）付近で2日間、13kg程度の荷を背負って、加地幸雄とともに高地順応の訓練をおこなって、ウィンドリバー山系の山旅に備えた。

渡米する前、大雪山や羊蹄山などで数回おこなったトレーニングの成果が出て高山病の兆候はなく、ウィンドリバー山系の山旅は可能と判断した。但し、腰痛は少々危険だと指摘された。

これまでキリマンジャロで、ヒマラヤで、アンデスの山々で高山病に悩まされ、苦しめられた経験を踏まえ、低酸素対応はかなり慎重に神経を使って実施することにしたのが効を奏したようだ。

2) 登山要項とロッキー山系の山旅

オルガナイザー兼ガイドのメリンダから送られてきた登山要項には、風水山系（WRⅡ）の「熊の耳」～「馬蹄形の塔」を巡るワイオミング・ロッキー山脈の山旅と表題が付けられ、日程は8月23日から31日の9日間とあった。WRⅡは8月15日から23日まで第1陣のWRⅠが実施されたからだ。参加者が多く山行を2回に分けたのである。メリンダはカリフォルニア州サニーベイルでコンピューター関係の自営業をしているフランス系アメリカ人で夫はネパール人のシェルパ出身。

詳細は登山口までの輸送機関、登山路の概要、費用、食材やキャンプ用具、救急薬品や摂生法、体力調整など注意書きが届き、地図は集合場所のワイオミング州バインデイルの運動具店で調達できるとあった。

数頁に及ぶ詳細な要項を配布してきたのにまず驚いた。出発点から終点までのおもな見所、標高、歩く距離、時間、朝と夕、日中の予想気温、地形や地質の様子、食事内容など克明に書かれている。出発から帰着までのコース状況や見所も明記されていた。

心配なことは、荷物が重いこと（20kg前後）、高度が高いこと（3000～4000m）、歩く距離が長いことだ（1日8km～14kmを8日間）。これは訓練する以外ない。訓練すれば8日間の山旅に耐えられるか、ということだった。

さらに驚いたことは9日間山旅のガイド料、食費すべて合わせて1.4万円程度という安さ。ニュージーランドのミルフォード4泊5日の山旅12万円、ルートバーン2泊3日の山旅で8万円とは大きな差がある。

これはリーダーでガイドのメリンダ・グッドウォーターの献身によるものであるが、私を除く全ての参加者が「シエラクラブ」という自然保護団体のメンバーであり、これまでの山旅で同行した仲間集団であることが、現地ではじめてわかった。

今回のコースは自然保護区ではあるが国立公園に指定されているわけではない。登山主体が山岳旅行業者のような利益を上げる団体には、入山料の支払い義務があるが、そうでない個人やグループはかなり自由に歩くことができる。しかし、入山手続きは必要である。

国立公園に指定されれば一層規制は強まる。例えば幕営しようとしてもキャンプ指定地以外は禁止されるのが普通だ。国立公園指定を好まない自然保護団体もあり、今のところ自然保護区になっている。

アフリカのキリマンジャロ山やヒマラヤの山々、ニュージーランドのトレッキングでは入山料が必要だ。ヒマラヤのトレッキングでは高度や地域によって入山料金は異なるが最高峰のエベレスト山は350万円（日本人女性8番目の登頂者久末真紀子）に達する。

要項には次のようなことが記されていた。

登山準備としてのコンディショニングは、1週間に4～5日、1回40～50分のランニング、水泳、サイクリング、階段の上り下りなど心臓強化、球場や陸上競技場の観覧席を利用した脚力強化などもいいが、やはり実際問題、20kg程度の荷物を背負って山々を歩くことが一番のトレーニングだ。WR山系に参加する前、標高差300～700mを13～16km程度は歩いて欲しい。これはWRで毎日歩くスタンダードでもある。コンスタントに実行することだ。ステッキ（ポール）も持参するのがいい。その他、登山家のトレーニング方法を参考にしてみるのも良い。

さらに（1）山行に必要で期待される情報、（2）比較的近い空港から登山口までの道路状況や時間、（3）山行に必要な経費、（4）食糧や炊事器材、（5）救急薬品や飲み水の安全を確保させる殺菌剤、（6）山行までのトレーニング方法、（7）詳細なバックパック自己装備品一覧、（8）日程表などが半年前には参加予定者に配布された。

感激したのはガイド付き山行としては驚異的に詳細かつ親切なことだ。9日間のループ式トラックにはエスケープルートがない。

途中、体調を崩しても近道して登山口に戻ることは出来ないのである。4日の中日に故障すれば4日かけなければ出発点に戻れない。慎重には慎重を期さなければグループ全体に迷惑が及んでいく。

そんな意味が込められた詳細な案内事項だった。

3) 山行での食材と食事内容

食事については大雑把な献立は示されていたが、具体的なメニューはリーダーのメリンダがノートに書き込んでおり、それに基づいて指示が出されるが、実際には殆どがメリンダ作の食事と言って良かった。

日本で山の食事と言えば、定番はおにぎり、カレーライス、インスタントラーメン、おもち、パスタやスパゲッティなどである。大抵はブタンガスとコンロを準備して簡単なメニューで済ませる。夕食時にはウイスキーや焼酎などアルコール分が強めのお酒を飲む人も多い。日帰りや1～2泊の山行であればビールを運び上げることもあるが、アルコール分の割に重量があるから長期の山旅には適さない。

風雨に見舞われたときはどんな場所で料理し、何処で食するか興味があった。私は1人でも4～5人用テントを持ち歩くから、風雨が強ければテント内で食事の準備と食をとるのが普通だ。

このパーティーはタープを使った。快適とはいえないが雨は大抵夕立で短時間に終わる。これが日本と違う乾燥地帯の気候だ。

山行の食事は8日分、1日目の昼食から8日目の昼食まで主催者が用意する。料金は1.4万円内でおさめる。メリンダは事前に調査書を渡し、個人的にアレルギー性のある食品は申し出るように要請した。食事内容は、生肉など排除するが、魚や鶏肉はサービスできる。またダイエットも考慮したものでベジタリアンには便宜を図っていく。栄養価が高く、エネルギーの出る乾燥野菜や果物、自家製の乾燥冷凍食品など。メニュー内容は毎回異なり重複はなかった。

WRⅡの朝食は毎回7時半だった。これは規則的に守られた。7時頃にリーダーのメリンダが起き30分以内で11人分の朝食をつくる。食後直ぐに登山道に出られるように早さとシンプル内容がテーマだ。シリアル(穀物)に熱いミルク

ク（粉乳）あるいは冷たいミルク。果物、ジュース、数種類のパンとコーヒー、ココア、紅茶、緑茶である。各自、用意したアルミ製あるいはチタン製の容器で食べる。

山行の出発時間は9時、これもほぼ正確に守られた。

昼食はチーズ、サラミソーセージ、ビーフジャッキーにパンかクラッカーがつき、乾燥フルーツとクッキーだ。毎日、少しずつ内容は異なるが概ねこんな献立で、昼食は、朝食終了後にメリンダから配られ各自持参する。チーズはモッツァレラ、ごつく大型に切り落とされる。

夕食はメインコースとしてクラッカーとパン、穀物やパスタなどのイタリア風、メキシコ風味付けで、大抵なかにピーナツやアーモンド、カシューナツなど豆類の砕いたものが混入していた。特段に豪華というわけにはいかない。しかし余ることはないように量を調整してある。

メリンダはかなり綿密な献立表を準備し、食材を運んできているので料理の時間は少なくて済む。山の食事献立のコツは乾燥穀物や乾物を持ち歩き水と混ぜてミールを作り上げる極めて合理的なものだが、サラミやチーズ、ハム・ソーセージは既製品を持参する。リーダーの指示に従いメンバーが食事作りを手伝った。

各自容器は1つ、スプーン、フォークも軽い物1つを用意した。食事の残滓物を極端に減らし、持ち帰る残り物を少なくすることは当然だ。

食事が不足した場合の補食やおやつとして1kg以上の菓子類やナツが各自に与えられているから、それで補給する。このおやつはチョコレート類、飴とナツなど固めた菓子類で、日本人がよく山に持参する魚の薫製や魚介類の乾燥食品は全くない。こうした食品はグリズリー熊やブラックベアを近づけないための配慮ともいえる。乾燥品、薫製品でも熊は数キロ先から匂いを嗅ぎつけるからだ。

ウィンドリバー付近は北極系グリズリーの南限に当たり、またブラックベアの多い地域とされている。

食料の輸送は小さなドラム缶（カニスター）を各自1個貸し出される。これは高さ40cm、幅30cm程度の頑丈な缶で熊が叩いても壊れる代物ではない。重さも1.5kg程度あり、鍵がかかる構造だ。

山行中は各自食料を入れて運ぶカニスターは、夕食時集められ食事に必要な食材の出し入れをして、分配する量が毎日均等になるよう重さを計量し、翌朝

各自に再配分される。

また、熊の出没が多い地域に幕営するときには、食料物資は大きめの袋に詰め込み、木の枝先に吊す。これは紐の先に石をつけ、投げて枝に絡ませるのであるが、最近では熊が太い幹に縛り付けた紐をほどいたり、かみ切ったりする技を憶えたため、慎重にやらなければならない。幕営地に樹木植生があれば食糧の木吊しも可能であるが、適度な高さの木が無く不可能な場合もある。

出発点から1日で到達できるビッグサンディ湖畔の広大なキャンプ地には熊対応食品貯蔵コンテナが設置されている。長さ2m、高さ1m、幅1mの頑丈な鋼鉄製で施錠は鎖で縛る方式。誰でも利用できる。今回のWR山行中、熊対応のコンテナを見たのはこの1回だけだ。

熊と共存して生きたい、熊のいる環境を大切にしたい、しかし熊の被害は最小限に留める工夫がある。そのためには熊に人間の食料の味を絶対に憶えさせないことである。

その鉄則を守るためにはいかなる食べ残しも持ち帰り、テントの中に置くようなことをしてはならない。そんな意識が漂っていた。

コミッサリー（共同装備）の中身は食材だけではない。フライパンや鍋、コンロや燃料、風防器や秤までいろいろだ。毎日、何を誰が運ぶかはその日にならないとわからない。

日本で一般的に利用されているブタンガスは使わない。ボンベが空になると空き缶を運ばなくてはならない。白灯油仕様のコンロの方が便利だとメリンダはいう。

食後の食器洗いは少しかだけ洗剤を使う。今回はキャンプ地が河川、ないし湖畔で水が得やすい条件が整っていたからだ。雪を融かして水を得たり、水筒水を使うような、水の得にくい条件であれば、トイレトペーパーでふき取りアルコールで消毒する場合もないわけではない。衛生面の配慮も欠かせない。

雪解け水や美しい河川のせせらぎ水もそのまま飲めない。日本の山岳河川水と違い、ロッキーの山々の高地は比較的フラットな面が多く、湖沼も多い。鹿や山羊、ウサギやキツネ、ビーバーや熊など野生動物が棲息している。ビーバーは湖沼の島に巣穴をつくって棲息しているからだ。また、雪面には微びがあって薄いオレンジ色の縞状の模様を醸し出している場合がある。

融雪水を飲んで下痢に襲われることもあり、飲料水に消毒液の混入が不可欠だ。

出発時、小さな消毒液用の瓶を渡され、1リットル2ドロップ程度落とし、20分後から水を飲むように指示される。多少、薬臭さはあるが下痢するよりはましだ。

ロッキー山脈エリアは非常に乾燥した気候地域だ。アメリカのなかでもドライエリアである。降水量に比べ蒸発量が多い。いつも2リットル程度の水は携帯しなければならない。水筒水だけで2kgである。

キリマンジャロ登山では山を流れている河川水を現地人のガイドやコック、ポーターは飲んでいるが外国人、特にトレッカーには飲ませない。有料のペットボトルを持参するよう指示された。

ヒマラヤも同様である。標高3000m前後でも棚田があり、段々畑も存在し、多くの家畜が飼育されている。河川水にはさまざまな細菌が混入しているから飲めないのは当然かもしれない。

水筒も簡易なペットボトル、白灯油など入れるアルミ缶、強化プラスチックなど一般的だが、最近リュックザックの中にビニール袋水筒を入れ、ビニール管で首元まで引いて口で吸い込むハイドレーションシステム水筒を持参している人々がいた。誠に便利に思われるが、管や水筒の掃除に手間暇がかかるといふ理由で使わない人もいる。装置が複雑になればそれだけ洗浄や消毒に手間がかかる。

4) WR II の山行記録

WR 山行の出発地点ビッグサンディオープニングには40～50台の駐車スペースがあり、川沿いに幕営地も併設されていた。当初、ここにキャンプして出発する予定が急遽変更になり、パインデイル市街地のモーター「サンダンス」に宿泊、早朝2時間半かけて車で出発点に向かうことになった。

出発点ではコミッサリー（共同装備品）が計量器で均一になるように計られ、体重、年齢、性別に関係なく赤の布袋に詰めて分配される。道中8日分のおやつ類（主にナッツ類、チョコレート、キャンディ、飴で固められたスチックなど）が1.5kg程度各自氏名入りのビニール袋に詰めて配られた。食品は全て幕営地で集められ熊に襲われないように保管し、翌日再配分する。毎朝計量調整が行われ、均一重量にされるのだ。

リュックザックの大きさは平均80リットル、重量は個人装備の違いで異なるが概ね20kg～25kg前後だ。ベッドマットやサンダルはザックの外付けが目立つ。

第1日目（8月24日）

午前10時05分、ビッグサンディ川に沿ってフリーモントトレイルと称される山道を北上すると間もなくアイアンクreekメドゥと名付けられた草原に出る。周辺をかなり密集した松林に囲まれたなかに広大な草場が現れ、モレーンの石れきが分散している。

馬4頭（2人が乗馬、2頭は荷物運搬専用）の乗馬登山、リヤマ1頭に荷をつけて歩くハイカー3人に出会う。しばしの時間、家畜隊と談笑。

馬やリヤマはレンタルで給餌・吸水方法や取り扱い方の訓練をしたあと有料で貸し出している。荷物運搬の場合、人間の背で運ぶ2倍程度の重さを家畜の負担としているという。

ホーストレッキングあるいはリヤマトレッキングと呼ばれる山旅は以前から普及しているが、かなり急峻な山岳地帯でも家畜が利用されている。グランドキャニオンではロバやラバが利用されているが、リヤマは南米アンデス産の家畜である。

標高2820mにミークス湖がある。湖に近いブリジンウイルドネスの境界を越える。ここからは北は自然保護区である。本来ならば、国立公園並景観を有するウィンドリバーだが、公園指定を受けると規制や制約が厳しくなり、観光客の入り込みも増えるから自然保護区の状態にしておきたいと主張する人達が出た。

フィッシュパーククリークと呼ばれるフラットな草地付近には南にデバイド湖、東にフィッシュ湖、北にミラー湖が点在して流れ出す河川は西に向かい太平洋に注ぐ。まだ山岳地帯を歩いている感じはない。森林帯のなかだ。

昼食はミラー湖畔の草地。サンドウィッチにイタリア風とチョコレートパイに丸いストリングチーズ、杏子の干し物など出発点で配られ、各自持参した食品を大きな石や草地の上で食する。昼食時間は40分。荷は背負い上げるときのことを考え、高めの石の上などに置く。初日は荷の重量で肩が痛む。

標高2952mのダズ湖を西に見ながら北上を続け、標高2993mのマース湖で10分休憩。ここからヘイリーパストレイルを北上して標高3000m地点を通過、最初の幕営地3055mのワジャキークリークに到着したのは16時丁度である。私のリュックの重さは20kgを越えた。水2リットルとウイスキー1リットルで3kgだ。

3055m地点のワジャキークリークの川縁で1日目のキャンプ。東側には数

日後ループ状に回って到達するであろうサークオブタワーズの山並みが距離の長さを越えてははっきり見える。乾燥地域の空気は遠い景色を近寄せる不思議な魔力がある。

第1日目キャンプ地からは東側に見えるこの景色も3日後にはロンサム湖から西に眺めることになる。

クリークの流れは高原とは思われないゆったりした湖のような佇まいでロッキー山間地域の広大さを物語っていた。

流れが緩やかなだけに水は透明で美しいのだが川岸にはジャッカルやビーバー、山羊や野生の羊、馬やリヤマが水を飲んだ爪痕も残されており人間がそのまま飲めば下痢の恐れがある。すべて飲料水は消毒液を混入させるか、煮沸して飲む以外方法がない。

雪渓が融けて直ぐの水場も雪の上に赤かびがあり、そのままは飲料水に不適である。

テント、寝袋は各自持参した物を使用するが、1人用テントが大半を占めた。

加地幸雄は、「出来るだけテントの数を減らすためには複数人数でテントを利用するのが自然にとって優しい」という。IBM 保険の元副社長ロイは、「ひとの軒で寝られないよ」と1人テントを持参した。

日中は20度近くあった温度も山の夜は急速に冷え込み、早朝は霜が降りる。この季節、零下を記録することもあれば降雪でテントの除雪が必要なときもある。

テント設営は河川から100～200m以上離れた場所を選ぶのが決まりだ。私は加地幸雄が持参した2人用テントを使わせていただいた。

このテントはREI (Recreational Equipment Inc.) 製のフライシートつきだが天井に空気抜け窓があり、テント内の蒸気を外に排出する効果があって極めて軽量だ。テントの出入り口も左右に用意され、フライシートが広いからテント本体との空間にリュックザックを置くことも可能だ。最近のアメリカ製テントは、合理化され使い易くなっている。

夕食はクラッカーやパンを含むメインコース。メリンダが作成した献立表で、検事のジュディらが手伝った。食事量は不足気味ではなくむしろ余り部分を食べ切るよう工夫されていた。食べ残しはゴミになり持ち帰らなければならない。持ち物をグラム単位で計量し、持ち歩くメンバーもいるから食べ残しには慎重にならざるを得ないのだ。

加地幸雄が持参した空気圧式マットや枕、ダウンでないがダウン並の暖がとれる新素材の寝袋など装備に感心させられた。ダウンは暖かいが水分が浸透すれば不具合が生ずるとの理由である。寒いときインナーとして利用するダウン下着にも同じことがいえる。

朝方の気温は零度前後になり、テントや外に置いたリュックは霜が降りて白くなっていたが通気性の良いテントでも寒さは感じなかった。快い疲れが熟睡に誘い込んだ。

歩行距離14m、歩行時間6時間、標高差303m。

第2日目（8月25日）

7時半起床、8時朝食。朝はシリアル（乾燥穀物）にホットな還元乳、数種類のパン、果物とジュース、コーヒー、紅茶、ココアである。急いで食べ食器を洗剤で洗う。洗剤を使った水は草むらに流した。朝食づくりはリーダーのメリンダが中心に行ったが、若干の参加者が自主的にサポートし、食器洗いは参加者が分担して行った。

作った分は必ず食べ切ること。残飯になれば持ち帰らなければならない。決して埋めたりはしない。野生動物に人間の食糧の味を知らしめないことが鉄則だからだ。

この日の行程はロッキー山脈の脊梁部分、ヘイリー峠を越え、ウィンドリバー山中でも大きさを群を抜いている氷河湖グレイブ湖畔の幕営地まで歩くことだ。

ヘイリー峠は標高3388mだが、大分水嶺山脈が東西に走向している部分で南側から北側に峠を抜けて行くことになる。

朝食後の仕事のひとつは排泄だ。誰もが園芸用小型スコップを持参して適当な場所を選定する。排泄はスコップで穴を掘り、排泄後土をかけるのが原則だ。手頃な石を掘り起こし、その穴を利用する場合でも土または小砂利をかけて石を元の位置に戻す。また使用した落とし紙はビニール袋に入れて持ち帰る。これは徹底して守られていた。キャンプ地には2～3組のキャンパーがいるが誰もがこの方法だ。慣れるまでは戸惑ったが、慣れればごく普通のことである。場所によっては排泄物は全て持ち帰るところもある。

午前9時、北に向け出発する。早朝は冷気が漂っていて寒く感じたが、リーダーのメリンダは半ズボン、半袖シャツの出で立ちだ。登山道沿いにはスカル湖、マース湖、ツインレークスの氷河湖が、少しずつ湖面標高を上げて分布し

ているが、それぞれの湖畔を通過して、左手にピラミッドピーク（3645m）を見ながら、やや急な登りを越えるとヘイリー峠。昼過ぎ到着した。

展望は素晴らしい。北西にフッカー山（3790m）をはじめ、ほぼ富士山程度の高さのタワーピーク、グリセードピークなどが林立している。花崗岩盤の切り立った先鋒や山頂はフラットでも急崖を伴った無植生の山々だ。まさにロッキー、ロックの山嶺であることを伺わせる。

北部の正面にはすり鉢盆地のようなカールを抱くムセンビーピークをはじめ、尖峰群が集まり、その東はパイロットノブと呼ばれるドーム状岩盤が展開する。

ヘイリー峠の南東に大分水嶺の背骨部分が続く筈だが、手前のウォールが邪魔になり峠から展望することはできない。

峠から東側に降りる斜面は、急傾斜で「家畜の通過は不可能」と表示されている。ここからの流水は全てカリブ海に注ぐ筈だ。太平洋とカリブ海の大分水嶺は感激の瞬間だった。

峠の急斜面（標高差300m）を転げ落ちるように下り、万年雪の雪渓を滑るように降りるとバプティステ谷に出る。登りでは遅れがちだったIBMの巨漢ロイも下りでは誰よりスピードで坂を降り、雪渓を横切った。人には特技があるものだ。

直ぐにグレイブ湖畔にある2日目の幕営地に着くはずだが、湖畔のトレイルは長さ3kmに及び、湖とグレイブレイクドーム（標高3277m）の接点にあるトレイルはアップダウンが激しくなかなか湖の東側のフットブリッジに到達しない。東西に長く南北の短いバナナ型の氷河湖だ。

16時、幕営地に到着し、テントの設営、夕食の準備にとりかかる。湖から幕営場所までは200m程度離れるよう指示される。フラットで大きな花崗岩岩盤は炊事用テーブルとして使い、倒木や石が椅子になる。湖畔にはバンクス松、スプルース（樅）、バーチ（樺）の樹木がまばらにある。夕食で使う以外の食料は赤い大きな布袋に入れ、松の木枝に吊した。ロープの先に小石を縛り、バンクス松の枝に投げてロープをたぐり寄せ、袋をつり上げるのだ。勿論、熊対策。このあたりは大型のグリズリー熊やブラックベアの棲息域だ。

藪蚊はいるが日本の蚊に比べ小さくて見えにくい。防虫剤を塗っておけば刺されないことがわかった。アメリカ製の虫除け剤がいい。藪蚊の大きさや性質は国や地域によって異なっている。夕刻、加地幸雄に腰、肩に湿布を貼っていただく。膝痛と肩の石灰化による痛みはあるが昨日ほどでない。これから大き

な障害にはならないだろう。

歩行距離12km、歩行時間7時間。標高差は430m。

第3日目（8月26日）

午前9時、テントを撤収し、南東方向に出発。「熊の耳」と呼ばれる登山用トレイルから「サウスフォーク・リトル・ウィンドリバー」に沿って、上流へU字谷底を進む。左右に3800mのヴァレンタインピークやチェスリッジの氷河で削剥された岩山が見えるが陰しく豪快な山容だ。

川の渡渉は山靴を脱ぎ、サンダルに履き替えるが、氷河から融け出す水は冷たい。膝下を濡らして渡渉する。近くに展開する水面標高3151mのヴァレンタイン湖付近の川縁で昼食、クラッカーやパンとチーズ、サラミソーセージ、クッキーなどを食べ、川で汲んだ水に消毒液を混ぜて飲む。慣れるまできな臭い消毒液の匂いが気になったが仕方なかったが、下痢するよりましだ。山で下痢すると力がでない。荷の運搬に支障がでるから気をつける。

右前方に切り立った「カセドラルピーク」（3687m）を見ながら次第に高度を上げて行く。文字通り巨大な大聖堂を思わせる尖鋒だ。樹木植生が見られない高原状の地形だがよく見るといくらか夏を過ぎ枯れた高山植物が点在している。8月の下旬は僅かムラサキ色のフウロソウ科の花、黄色いバラ科の花を除き殆ど枯れてしまっている。少々季節が早かったらいろいろな植物の開花状況に出会えたに違いない。

殆どピークに近い標高3500mのカセドラル峰の肩が今日のキャンプ地だ。ピーク足下の窪地に貯まった雪渓、その上に薄く赤ちゃけた色が見える。これは黴だ。雪渓から流れ出すきれいな水が、幅のある浅い小川をつくって流れているが、黴のせいでそのまま飲めない。見た目、清流なのに消毒液を混入しない自然水が飲めないつらさを噛みしめる。

周辺に林立する岩山も幕営地に高度があること、広大であることで高さを感じない。

日本の山は谷や斜面が急で麓から一気に登り詰めるが、ロッキー山脈は高度の高い山々の斜面が緩く広大で、山頂付近に到達してもフラットな面の占める比率が高い。

風雨があれば強風が吹き抜け凄い状況になるだろうことが容易に想像できた。

幕営地は水場から500m離れた峠、水汲み作業がやや大変だったが、日光の



標高3687mのカセドラオピーク付近の幕営地。
ピーク足下に幕営。水場は融雪水が近くを流
れている。写真は筆者。(2009. 8. 26)

暖かさを感じながら高原状の山岳地帯を散策するのは快適以外表現のしようがないもの。日没は20時頃、夜明けは7時過ぎ。アメリカの夏時間は夕刻の太陽を長く感じる。

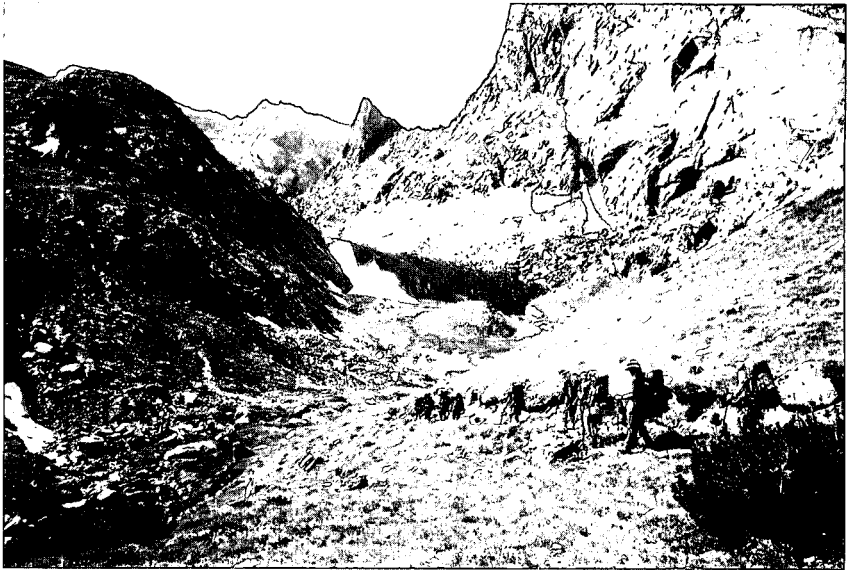
歩行距離12km、歩行時間6時間20分、標高差462m。

第4日目（8月27日）

早朝は零度前後。テントと外の巨石に立てかけておいたリュックに5mm程度の霜が懸かっていた。標高3500mで雪渓が残る幕営地の早朝はさすがに寒い。

テント内は外気が通過するように天窓を開けておいたが下着2枚と上衣、羽毛のアンダー、雨具も着込んで羽毛のシュラフに包まれたから寒さは感じなかった。早朝の外気は冷たく凜とした、体が引き締まる空気だ。無風快晴でロッキーの山々と深い谷が見渡せる。

4日目になると、コミッサリーの重さに変化が生じた感じになる。食材が1～2kg減っているはずだ。最終日の体は羽根の生えたようになると加地幸雄は表現したが、日々食糧は確実に減量される。しかし、重いのは熊よけのカニスターだ。これは最後まで同じ重量を持ち続けなければならない。



リザードヘッドトレイルを南に下る。中央の尖峰はリザードヘッドピークで標高3892m。

昨日の登山道と分かれ、カセドラルピークの頂上付近を回り込むように西に向かう。リザードヘッドトレイルと呼ばれる山道だ。ピークまで標高差160m、尾根を行けば直ぐに登れそうな位置、3571mの小さな峠を越す。高所を歩いているが稜線を歩くのではなく、フラットなアップダウンのある高原を移動している。南側は大分水嶺山脈の峨峨とした山々が万年雪や氷河を懐におさめて屏風のように立ちははだかっているが、歩いている登山道との比高はあまりない。だから高さは4000m弱の山々でも仰ぎ見るような凄さは感じないのだ。

スイスのマッターホルンに風貌の似たりザードヘッド峰（3892m）が目の前に登場し、山麓足下にベアレク（水面標高3190m）が横たわっている。ピークと湖面の比高は700m、ひとつの岩盤からなるピラミッド状の山で植生はない。ベアレクの標高は日本アルプス最高峰の奥穂高岳と同じだから、その上に700mのピラミッドが乗っているようなもの。反対側の峠中腹から見ると、この峰を起点に左回りにU字の「サークオブタワーズ」の山群が林立しており、真ん中氷河谷の奥には今夜から湖畔2泊を予定しているロンサム湖が輝いている。谷底には針葉樹の森が分布するが、それを取り巻く塔状の地形は全く岩盤だけの山容だ。サークオブタワーズを含む大分水嶺山脈は、東に向かっ

て個性的な様々なカタチを見せながら続く。

大展望に魅せられて昼食をとる。リーダーのメリンダが大きな石の塊に乗ってポーズを取れば多くのメンバーが「サークオブタワーズ」をバックに写真を撮った。メリンダが今回の道中最も美しいと太鼓判を押した景色が青い空と共に眼前に現れたのだ。

岩陰には、「マウンテンブルーベル」の紫色をした釣り鐘花が行く夏を惜しんで咲いていた。

急な斜面を下ること500m、スプルス（縦）とパイン（バンクス松）の森に覆われたU字谷底に出た。北ポポ川の流れる低地「リザードヘッドメドウズ」で休憩。休憩時間はいつものことながら15分程度。ノースフォーク道に合流した標識木が1本立っているが、文字は何も見えないほど風化していた。これまでも登山道の分岐点には案内の立木や横板があったが、文字がはっきり読みとれい看板もある。

幕営地の湖畔までは3.3km、僅かに谷を登り詰めて行くが急坂はない。森、メドウ、森、メドウが繰り返し出てくる。急に空が曇り大粒の雨に見舞われる。誰もが雨具に着替え歩いて行く。サンダーストームという、この夕立は瞬間的には土砂降りの状況になるから雨具は欠かせない。いままで雨の心配はなさそうな空模様だったのに突然、雨になる。これが山の天候だ。しかし、サンダーストームは20分程度で止み、我々は水河湖ロンサム湖畔に着いた。15時30分だ。

湖畔から400m以上離れた場所にテントを設営することになっている、好きな場所を選んで設営せよとメリンダが伝える。

サークオブタワーズの核心部に位置する湖だ。屏風のように、そして全体的には馬蹄形に林立する花崗岩盤群は湖からの比高が900m前後あり、尖峰化しているから、ド迫力というべきか。見とれているほどに巨大で美しさ、豪快さに魅せられてくる。

初日を除いてキャンプ地に我々のグループ以外人影はなかった。4日目にキャンプ地にもう1組のキャンパーがいた。若人たちである。キャンプ地が仕切られているわけではなく広大だから他にもいたかもしれない。2日間滞在してこの組以外のひとには会わなかった。同じグループでも、それぞれ幕営する場所は好きな地点を選ぶから離ればなれになりがちだ。それでも食事時大声をあげれば届く範囲に分散、幕営することになった。

歩行距離14.4km、歩行時間6時間30分、標高差513m。

第5日目（8月28日）大分水嶺のテキサス峠へ

この日、私はペンシルベニア州立大のハワード・ベトリーエと2人で大分水嶺のテキサス峠（標高3460m）を往復することにした。彼は大学で液体力学を専攻する科学者で50歳代の若さだ。10年前は全山水河で被われたニュージーランド最高峰マウントクック（3754m）やペルーのワスラカン山（6768m）の登頂に成功しているし、ロッキー山脈でも急峻なグランドティートン山（4173m）＜ワイオミング州＞にも登った経験を持つ。

9時20分に軽量のセカンドバックに水とおやつ、雨具を詰めてロンサム湖畔を出発、ハワードが先導役をするが、再三道を間違え幾多の岩場や急傾斜面に取り付き、雪渓を越えて峠に辿り着くまで2時間を費やした。途中野生の山羊やリス、イタチなどに会った。

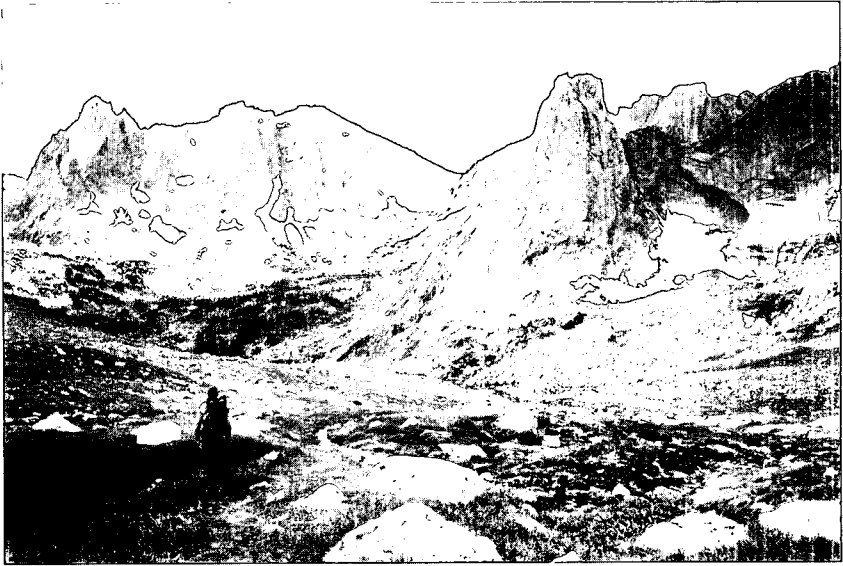
東側はリザードヘッド峰が急峻で幅広い露岩を突き出し、西側は「サークオブタワーズ」のシンボルともいべき標高3600mのローソク岩、ピンゴラ峰が聳えるが、峠とピンゴラ峰の標高が余り変わらないだけにロンサム湖から見た感じとは異なり、雄大なロッキー山脈を象徴しているようだ。その南奥はカール（懸谷）を抱く急崖の花崗岩群が聳える。また、翌日越える予定のジャッカス峠に続くトレイルらしき踏み跡もところどころ見える。ダイナミックかつ優雅な光景だ。

頂上付近で同グループのマイクとポウルにも会った。彼らは水筒1本持たずに先行して登っていた。峠からの展望の美しさにカメラを持参しなかった行為を後悔し、写真を自宅送るよう依頼される。

峠から北側には2つの氷河湖、北に伸びるロッキー山脈の背骨が脈打っていた。帰途は踏み道らしき跡を通過しインディアンペイントブラッシュやエンゴサクの仲間ではないかと思われる野草などお花畑を見ながらロンサム湖畔に出る。その間1時間強。峠への出発点と帰着点がかかなりずれていたことに我々はじめて気づかされた。「次に登るときにはこの道にしよう」とハワードが登坂ルートを間違えたことへの反省を込める。

午後はテントの中で疲労回復のための仮眠をとった。多くの仲間が石の上や芝の上、テントで休憩していたようだ。夕食後、キャンプファイアーをする。枯れ木はいくらでもあるし、石組みの炉もあった。他のグループの人影はない。

焚き火をしながら、自分たちの所属する「シエラクラブ」117年の歴史を振り返っている。メンバーの山登り経験談なども。



テキサス峠付近からサークオブタワーズの南側部分を眺める。中央やや右の尖峰はビンゴラ・ピーク。標高は3601m。歩行者はペンシルベニア州立大のハワード。

不思議なことは、彼ら誰1人お酒を持参していないし、焚き火を囲んで飲むこともない。

清涼飲料水も飲んでいない。メキシコ料理店で初会合した折、小さなビール瓶1本くらい飲んだひともアルコールは山に持ち込んでいないのである。この山旅で初めて一緒になったメンバーであるが、打ち解けた話が出るのは山の仲間意識からか。

歩行時間3時間半、標高差380m、歩行距離3.5km。

第6日目（8月29日）大分水嶺ジャッカス峠越えて

午前9時丁度にロンサム湖の幕営地を出発し3つ目の大分水嶺山脈のジャッカス峠（3267m）を越える。岩石地帯に短い草の生える、一見草原のような緩い傾斜地を登ると1時間30分程度で峠に着く。振り返れば林立する「サークオブタワーズ」の中心に氷河湖のロンサム湖があり、北側に昨日歩いて登ったテキサス峠の狭い通路が見える。テキサス峠は両壁が迫って狭隘になっているが、ジャッカス峠は広大だ。

下れば左右に、つまり西側と東側に大分水嶺が聳える。南側に開くV字状

の山嶺だ。その中ほどの山道を今度は下って行くのである。

斜面を下りアロウヘッド湖、北湖など氷河湖に出ると高山帯を抜けて松など樹木植生に覆われる。更に南に進むと6日目の幕営地ビッグサンディ湖畔(標高2938m)に着く。ここは樹林帯だ。ずっと下りが続くうえに荷が軽くなっていて快適な歩みが出来た。

出発地のビッグサンディオープニングに近いからか、ハイカーやキャンパーの姿があるが、決して多いとはいえない。ここも2泊して周辺の山々を歩くことになった。

幕営地の唯一の施設は、鋼鉄製で共用の熊よけの大型食糧貯蔵コンテナだけで椅子、テーブル、トイレなど一切ない。熊よけコンテナも、今回の山行中この幕営地で初めて存在を知った。

ビッグサンディ湖に流れ込む幾つかの分流した小川周辺はメドウが形成されている。緑の草地在周辺のバンクス松樹林と遠方に寝そべっているように見える巨大な花崗岩稜ヘイスタック山とのコントラストを引き立たせていた。

湖に流れ込む河床の高い小川の近くにテントを設営する。

歩行時間2時間、標高差330m、歩行距離4.8km。

第7日目(8月30日)

この日は南に走向する2つの山嶺、東側のヘイスタック峰(3630m)と西側のミラー峰(3484m)、テンプル峰(3931m)など9峰が林立する間の谷に横たわる9個の湖巡りに出かけた。ヘイスタックは文字どおり、乾牧草を積み上げたような、山頂がフラットな山で氷河浸食の影響を受けた巨大な岩盤に見える。地図上ではリトルサンディ山道と描かれているトレイルが、実際は花崗岩の巨大な岩盤が連続して平板のようになっており道はとぎれとぎれになっている。幕営地のビッグサンディ湖から一番高いテンプル湖までの標高差は300m。距離は一巡して10km程度だが道探しに手間取る。ワンデイハイクであるからサブザックに雨具、水筒、昼食だけの軽装備で軽いのがなにより幸せ感だった。

氷河湖間は河川で接続しているが、大半の河川は岩盤上を自由に流れる特異な景観、かつての氷河の削剥痕がいたるところで見ることができる。広大でフラット面がやや傾斜した一枚岩の上を流れる河川、それ自身が観光スポットのような奇妙な光景だ。ロッキーの名にふさわしい広大な一枚岩だらけの景色は見飽きることのない神秘的な迫力がある。

ガイドのメリンダは、ロック状の山々、麓に抱かれる氷河湖、岩盤の上を自由に流れる河川、岩盤の切れ目に生える若干の樹木植生、この景色は「サークオブタワーズ」と並んで、今回の山旅の双璧をなす豪快な景観だ、と説明される。

リトルサンディトレイルイーストと呼ばれる南方向の山道を登り詰めると、標高3931mのテンプル峰をU字の頂点にして山並みがサーク状に展開する盆地が現れる。そこには3カ所にくびれて瓢箪状になったテンプル湖が横たわっているのだが、その出口付近は1枚岩で、表面に氷河が運んだと思われる石がごろごろしていた。テンプル峰と同名の湖面との比高は700mだ。

ターンしてこのベイスンを下る。氷河期、氷河が北に流れ出した跡にミラー湖やラピッド湖が形成された。その脇を通過してロンサム湖に着く。木枝を集めて火を付ける。

夕食はニールとポールがパンケーキをつくった。やや重めのフライパンも持参してきていたのである。それに蜂蜜やバター、ジャムを付けて食べる。

夕食時に急に夕立になった。サンダーストームだ。あらかじめ準備していたタープの下に全員潜り込む。雨になると急に気温が下がった感じになった。雨はすぐに上がったが、焚き火は消えかかっていた。雨が止むと火力が再び強くなる。枯れ枝がたくさん落ちているので焚き火にはこと欠かなかった。

山旅最後の夜である。私は日本で1人山旅をするときいつも大きめのテントを持参していたので、今回、加地幸雄の2人用テントを2人で利用したから最初のうち窮屈な感じだった。しかし慣れれば快適になってくるものだ。私の躰が迷惑かと心配したが躰は少なく、相棒には寝言がむしろ気になっただけ。

夜、通常トイレに2度程度起きるのを常としていたが、今回の山旅では水の摂取量を減らしたことで、ビールを飲まなかったこと、空気が非常に乾燥していることで夜中の排尿のために起きる夜はなかった。

歩行距離10km、歩行時間4.5時間、標高差300m。

第8日目（8月31日）最終日

午前9時に幕営地を出発し、ビッグサンディ川に沿って針樹林帯を下る。食糧は食べ尽くし、アルコール1リットルも消費し、持ち水もいつもの4分の1程度にしたため背負う荷はかなり減少し、15kgあるリュックの重さを余り感じなくなっていた。不思議なもので20kgの荷が5kg減っただけでも、重さが半減

したような、そんな気分だ。身体が重い荷に慣れてしまったのであろう。ルンルン気分で周囲の景色を愛でながら歩ける。

8 km余を3時間かけて移動するから昼過ぎには出発点のビッグサンディオープンングに戻る。

今まで主に岩盤地帯、露岩地帯を歩いてきたから樹林帯に歩くのに潤いを感じた。いつまでも川に沿って歩き、時には川を渡る。橋はないが適度の間隔で踏み石があった。

ほぼ正午に出発点に到着した。1人の脱落者もなかった。けが人も、病人も。我々のパーティーは8月下旬組（WRⅡ）として設定されたグループだった。8月中旬（WRⅠ）組は、メンバーの1人は急遽取りやめ、もう1人は体調不良のため1日目で引き返し、更に1人はコースを歩けず4日目に元の道に戻っている。

50歳代～70歳代の中老年組の山旅に1人の落伍者がなかったことは、各自の事前の準備やトレーニングが十分だったのではないかとリーダーのメリンダがいった。

駐車場に到着し、共同装備品のカニスター（熊よけ缶）と飲料水用消毒液ポットを返却した。リーダー兼ガイドのメリンダに各自感謝を込めてチップを渡す。渡し忘れた私は、後で60ドルをカリフォルニアの彼女宅に送金した。

駐車場で解散。ウィンドリバー山旅参加者は自家用車とレンタカーにそれぞれ分乗し、空港のあるワイオミング州ジャクソンホールないしユタ州ソルトレークシティに向かった。

歩行距離8.3km、歩行時間3時間、標高差189m。

5) インテリの多い山愛好者達（シエラクラブ）の山旅

今回のウィンドリバー山行参加者は私を除く全員（10人）がアメリカ人で、自然保護団体シエラクラブのメンバーだった。

50歳代のメリンダ・グッドウォーター（ガイド兼リーダー・カリフォルニア州サニーヴェイル在住、コンピューター技術者）、ハワード・ペトリーエ（ペンシルベニア州立大・工博、ステートカレッジ市在住）、ジュディ・ホダス（デラウェア州裁判所検事、ウイルミントン在住）、フラン・フィンレイ（看護婦でニールの妻）、ニール・カミナル（ノースカロライナ州立大・ニルケスポロ在住、工博）、ポール・ケンパー（カリフォルニア州立大、サンタバーバ

ラ在住・工博)。

60歳代のロイ・スカトロ (IBM 保険会社前副社長・フロリダ州ヴァリコ在住)、マイク・ウォルター (前東芝アメリカ会社、カリフォルニア州ボルダークリーク在住、工博)、ナンシー・セイジ (看護学校教員、カリフォルニア州ストックトン在住)。

70歳代は加地幸雄 (日系アメリカ人、ソルトレークシティ在住、ユタ大名誉教授・哲博) と私の 2 人で総勢11人だが、研究者が多かった。

ウィンドリバー山旅に集まった人々は、私を除く全員が117年の歴史を有するアメリカの「シエラクラブ」の人々であり、民主党支持者が多かった。民主党は共和党に比べ、自然破壊防止、自然保護にとりわけ熱心な活動を展開する。全国組織と地方組織があり、会員数は75万人と規模が大きい。大卒、プロフェッショナルな人々の比率が高いといわれる。

自然保護のために議員に圧力をかけるなどロビー活動などの外、海外登山・カヌーイング、自転車や乗馬などの会員活動がある。

クラブ員は毎年4000円程度の会費を支払う。会費は自然保護運動費用や裁判費用に使われる。

今回の参加者は比較的年輩者が多く液体力学や化学、機械工学などを専門とする技術屋が半数を占めた。メリンダが仲間のナンシー、マイク、加地らに話しかけ、それらの友人を誘って今回のチームが編成されたようだ。

メリンダはヒマラヤとアラスカの山々、キリマンジャロ、アコンカグアの登頂経験があり、シエラクラブの山岳案内人を15年以上続けている優れたオルガナイザー兼ガイドである。今回のトレッキングコース選定は自らの下見とトライアルの末、決定したという。

マイクはヒマラヤ山脈マナスル (8163m)、ハワードはニュージーランドのマウントクック山 (3754m) やアメリカのグランド・ティートン (4173m) などの登頂歴がある。加地はイタリアのドロミテ山塊やヒマラヤ山脈アンナプルナ山群を昨年歩いている。ロイはニューハンプシャーのジェファーソン山やワシントン山を登った。比較的登山歴が浅いのは始めて2年の検事ジュディであった。ジュディはこの日のためにメリンダから送られた訓練メニューをこなしての参加であった。

リーダーのメリンダ・グッドウォーターはフランス系アメリカ人だが、夫はネパール人のシェルパだ。年間200日は山歩きの日々が続くという。カリフォ

ルニア州の自宅でコンピューター事業を行いながら、山のガイドや自然保護に取り組んでいる。

メリンダは、背は大きくないががっしりした体躯で、女性ながら髭をたくわえる精悍な女性でキャンプ時の食事づくり、山岳ガイドで優れた力量を有しているし、何事にも献身的だ。

前年も、ウィンドリバー別ルート（大分水嶺のロッキー山脈西斜面を北上）でガイド。今年は、白眉のループコースのためリハーサルを行い、8月15日出発の第1隊、23日出発の第2隊を設定した。（各8泊9日）

ウィンドリバー山系は登山路がかなり入り組んでいるから迷いやすい。またトレイルが判明しにくい部分もある。分岐点に標識も少ないからガイドの役割は不可欠に重要だった。

メンバーの出身地は全米に跨っている。ロイはフロリダ州から、ジュディはデラウェア州から飛行機を3度乗り継いでソルトレークシティ国際空港に着いたが、その総時間は私が出かけた成田空港からソルトレークシティ直行便（2009年開設）の10時間を超える。メリンダはカリフォルニアから車を走らせて登山口まで14時間かけてきた。

日本人のように団体行動に慣れている国柄と異なり、アメリカ人は自己表現力が強いし、グループ行動が苦手な人々もいる。そのなかでメリンダのような強力なリーダーシップと行動力のある人間が原動力になって10人をまとめたから行動時間も正確にまもられ、不愉快な気分になることもなかった。

6) 情熱的な山の愛好家・加地幸雄伝

私にとって20数年来の交流をもつ友人、そして長年に渡ってアメリカの山を教えてくれた人。今でも山を愛し続ける加地幸雄について記しておきたい。

加地幸雄は1936年、貿易商の父親、俳句を楽しむ母親のもとロンドンで生を受け、幼少期イギリスで過ごした。第二次世界大戦中は実家のあった北海道静内（現・新日高町）に疎開して少年時代を送った。

母方の祖父は宗教学の姉崎正治東京帝大教授（1873～1949）でハーバード大教授も経験した。夏目漱石や森鷗外と親交が深かった。また、姉崎は高山樗牛とも親交が強かったといわれている。

漱石が東京帝大で翻訳のアルバイトをし有能ぶりを発揮していた折、突如「面白くない」と辞任を申し出た。何人かの教授が留まるよう諭したなか、姉

崎は漱石の将来を見据えて背中を押し、松山中学への赴任が決まったというエピソードが残っている。

加地幸雄が父親とともにロンドンに在住していたとき、ロンドンに留学などでやってきた祖父姉崎正治に可愛がられたと幼少期の思い出を語った。

姉崎は宗教史、比較宗教学、キリシタン弾圧史などに業績があり、「姉崎正治集四巻」は言語学的宗教学、復活の曙光、国運と信仰、文は人なりなどからなる。

1907年、カーン財団の資金によるフランス、イタリア留学時の「花摘み日記」は、2009年ニューヨーク州オールバニ大学のスザンナ・フェスラー教授の翻訳で英語出版された。実に102年を経過して著作が翻訳出版されたのである。明治期に出版されたインド、イタリア旅日記「停雲集」も英語版として今年(2010年)同教授の手で翻訳出版されることになっている。

母親加地ときは姉崎正治の娘で現在97歳、東京都田園調布で加地幸雄の弟広世、高見らと同敷地内で生活している。この敷地は広大な旧鶴田浩二郎宅跡である。

ときはかなり歳を経てから俳句を初め、新聞や雑誌に発表してきた。加地幸雄は現在、母ときの俳句集全6巻の監修、出版を目指しているが殆ど完結に近い。印字せず手書きで和紙に書きマス刷りする形式で手が込んでいる。出版部数も限られているが加地幸雄の「渾身の母への思い」が伝わってくる。

その中には、長男幸雄のことを思っていることであるか、山の句・観山の句が40句程度ある。春夏秋冬の山々を詠ったものだ。

“無駄なもの無くて重たき登山の荷”

幸雄のコメント「“登山”は夏の季語で、私の母も、私の山旅に出で立つ姿を見て夏の句として詠んだものだろう。しかし、私には冬の句のように思われる。というのは冬山の荷は特に重いが省くものはなし、何か装備に欠けたものがあれば命にかかわる。しかし、なんといっても昔は重い荷物を背負ったものだ。体重の半分の荷は、冬山では軽い方だと思っていた位だ。」

“氷河の碧^{あお}決断に色あらば”

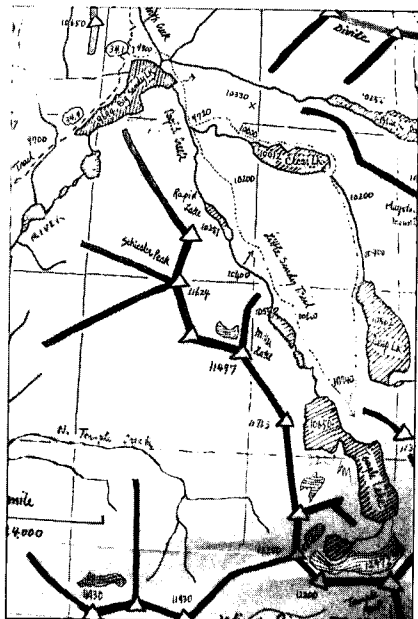
幸雄のコメント「俳句は現識、実感を神髄とするから、仮定の句は難しい。しかし、この句は氷河の碧を身をもって知るものに、決断直後の実感を惹起させる。もう実行のみ。右顧左眄はない。決断は氷河の碧^{あお}の厳しさだ。」

“土の着く前にたゆたひ春の雪”



右手奥はベアレイク。左手奥はロンサムレイクとサークオプタワーズ。両手を挙げているのは加地幸雄。

加地幸雄が描いた手書きの登山概念図。7枚のうち1枚。ビッグサンディマウンテン（大分水嶺山脈）の一部。24000分の1。



幸雄のコメント「春のぬくもりで、雪片が大きくなり、草の絮のように揺蕩^{たゆとう}で降りて来る。地上近くでは着地をためらっているようにも見える。山でも街でも見られる現象だが、この句は3月末の上高地を思わせる。日のぬくもりでは、もうアノラックも手袋も入らない。すると突如雲が陽を覆い苳雪片が舞い始めた。土に突く前にたゆたう雪片が」

加地幸雄の専門は「中国哲学」、「ギリシャ哲学」などである。

ユタ大学を早期退職し、山旅に集中する加地は、同大の名誉教授として「日本の俳句」の授業を2010年度担当する。主軸は松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の3人だ。アメリカ人の受講生に俳句をどう教えるのか。加地幸雄は「まず暗記をしていただく。それから説明だ」という。日本人にすら難解な俳句をアメリカ人に教える、そこには日本文化に精通した思想がなければならない。加地幸雄は完璧主義者を貫く。

退職して数年経過している名誉教授が、専門外の日本文化に関する俳句の授業を担当させられる、そんなアメリカの制度は規制だらけの日本とやや異なる。

加地幸雄の経歴に戻ろう。

加地幸雄は1954（昭和29）年、一橋大学社会学部に進学した。入学後直ぐに山岳部に入り、北アルプスの穂高連峰中心の冬山登山訓練に集中した。このとき、最も信頼できる山仲間が後の阿部謹也一橋大学学長、石弘光一橋大学学長（小泉内閣の税制調査会々長）の二人である。

一橋大学山岳部「針葉樹会報」か「同窓会報」か忘れたが、山岳部の後輩に当たるがひとが書いた「学長の登山」という一文があった。発行年月日など記憶にないが、過日、アメリカで加地幸雄にその話を確かめた。

「阿部、石、加地の3人は南アルプス登山を終えて静岡浜松駅プラットホーム上で飯盒で飯を炊いていた。途中、列車が入ってきたので急いで炊飯中の飯盒を汽車に持ち込みトイレの中で焚いて食べた」といったエピソードが載っている。

また、針葉樹会報（1974年12月号）に石弘光は、加地幸雄に伴われてソルトレークシティの冬、雪のネスキャニオンをスキー廻行したときのことを次のように書いている。

「食事の時、加地さんに1つ怒られることをした。サンドウィッチの包み紙を日本の習慣にしたがって、ついばいと捨てたときのことである。地元の登山家は決してそんなことはしない。プラムの種に至るまで仲間が捨てたら拾って

歩く。山をいかにきれいに保つかということで、われわれ日本人登山愛好者とは根本的に精神がちがっていると思った。まったく、恥ずかしく思った。赤面して木陰に捨てた紙屑をすぐにザックにいれることにした」

加地が15年ほど前札幌を訪れたとき、札幌大学のゼミ生15人と十勝連峰カミホロカメットク山登山に同行した。

雪渓を歩いてひとやすみしたとき、学生達の数人がたばこを吸って、吸い殻を雪の中に捨て、靴で雪をかけた。加地は日本語で注意した。「たばこを捨ててください」。優しい言葉だが重みがあった。学生達は何もいわず雪の中に靴で踏み込んだばこの吸い殻を掘り起こし、リュックの袋に詰めた。

元一橋大学教授鈴木秀勇は「一橋大学は加地幸雄の採用を決めて招聘したがユタ大学を動かそうとしなかった」といっている。

加地が一橋大学に赴任していれば、学長になっていたかも知れない。そうすれば「3人山男の学長登山」を書く人が現れたに違いない。

一橋大学を卒業すると直ぐにアメリカに渡りプリンストン大学で大学院を終了し学位を取得。その後、コロンビア大学大学院にも学び、アメリカ、カナダの幾つかの大学で教鞭を執るが最も長い35年間勤めたのはユタ大学である。

ユタ大学のあるソルトレークシティは断層山地ワサッチ山脈とソルトレークベイズンの接点に位置し、標高は1400~1500m、そして3000m~4000mの山々が聳え、山登りや山岳踏査にはもってこいの位置にある。加えて東側にはコロラド、ワイオミング、北にはアイダホ、モンタナの諸州があり、ここはロッキー山脈が背骨をなして登山起点にまで、車で1日以内の距離だ。

一橋大学時代の山仲間だった人々は、渡米して加地家を宿泊所にワサッチやロッキーの山々に出かける。

妻のティは白人女性であり山は歩かないが、山歩きには理解を示す。加地がアメリカに渡って父親の貿易商の仕事を継がなかったこと、白人女性と結婚したことなどが理由で父親により加地幸雄は勘当状態になったという。

加地は山登りが得意であり、好きというだけでなく山の地図を描くことを得意としている。本物の地図（24000分の1大縮尺図）を見ながら、緯線・経線を敷き、山、川、湖、山脈、標高、登山道を手書きで記していくのである。等高線は入っていないが山脈のカタチ、湖と川の関係、そして必要な地名を書き込んでいくいわば概念図だ。

今回のウィンドリバー山系山旅にも3色カラーの手書き概念図7枚まとめを

用意し、関係者に配った。一般に販売されている登山案内書の中には、方角や標高、周辺状況が書き込まれない、ただ道が描かれるだけの地図も少なからずある。手書き図の特徴は、登山者が歩く道（トレイル）を中心に、周辺状況がどう変化して行くか直ぐに理解できるもので地形図とは違った利用価値がある。2.4万分の1縮尺をB4、A3など7枚に拡大したものだ。

山歩きするひとが最も必要としている情報を的確、シンプルに地図に示す技法は、地理学者顔負けの技術力と発想の確かさである。長期間地理を学んできた私は大いに啓発された。

彼は夏冬を問わず地元のワサッチ山脈やユインタ山群を主に歩くが、ワイオミング、モンタナ、コロラドのロッキーやアメリカ西岸に近いカスケード山脈やシエラネバタ山脈にも足を伸ばしている。外国では昨年だけでもイタリアのドロミテ山塊、ヒマラヤのアンナプルナに挑戦した。

一橋大学の山岳部時代以来、半世紀以上、山を愛し登り続けている。

私はアメリカの在留研究時代、ワサッチの冬山登山やスキー登山、夏の岩山登りなどで加地幸雄に同行し、山の楽しみと喜び、山登り技術を多く学ぶ取ることができた。

私には学生時代も社会人になってからも山岳部や関係するグループで「山で鍛える」経験が無かったから、加地幸雄との出会い以降の四半世紀は山で呼吸する時間が一段と増えたような感じだ。

II フィヨルドランドの山旅

ニュージーランドは国の機関であるDOC（Department of Conservation＝国土保全局）が中心になって登山道や山小屋の整備を行い、世界中の登山者やハイカーに楽しい山歩きの提供してきている。

数あるトレッキングコースの中から北島の2カ所、南島に6カ所は特に設備が整い、人気の高い場所として一般に「The Great Walks」と呼ばれている。北島ではトンガリロ山、ルアペフ山及びその山麓の4日間コース（トンガリロ北サーキット）、ワイカレモアナ湖畔を4日かけて歩くコース。南島は6コースある。北端に近いアベルタスマン国立公園は3～5日間の海浜コース、南端の離れ島スチュアート島の「ルキアトラック」は3日間の森林歩きコース。残り4カ所はいずれも南島南西域のフィヨルドランド国立公園にある。

テアナウ湖南岸の山々を歩く「ケプラートラック」3日間は中級者コース。「ドアパスルート」もボートを使わずミルフォードトラックにアクセスする強健者向き2日間コースだ。その外、ニュージーランドには数多くのトレッキングコースが存在する。

海岸線の美しいエイベル・タズマン、湖岸線の見事なケプラーの各トラックも2010年2月歩いたが、今回は「The Great Walks」の「ミルフォードトラック5日間」と「ルートバートラック3日間」について詳細に検証していく。まずはフィヨルドランドのミルフォードトラックからはじめよう。

1) ミルフォードトラック55kmの山旅

第1日目(グレードワーフ～グレードハウス)

ミルフォードトラックは南島・南西部のテアナウ湖畔からミルフォードサウンド近くまでの55kmの山岳コースで通常4泊5日を要する。1日の歩行時間は15～21km、1日6～8時間歩く。

コースの最高地点はマッキノン峠の1154m、歩行は一方通行でミルフォードサウンド側からの逆歩行は禁止されている。宿泊施設は指定された山小屋やホテルでテント泊はできない。自然保護の立場から1日の歩行人数はガイド付き40人、個人ウォーク40人と制限され予約制がとられている。年齢制限もあり10歳以下、70歳以上は参加出来ないのが原則。但し高齢者は医師の診断書や登山経験を考慮して許可される場合もある。世界中から参加者があるので混雑しており予約は数カ月前でないとエントリーしにくい。期間も10月下旬から翌年の4月上旬までの約半年間だ。完全許可制のコースで自由な立ち入りは厳禁。

私は5カ月前、日本からガイドウォークに予約を入れ、2009年3月10日ニュージーランドに向かった。予約料は4泊5日分の経費で12万円。

南島最大の国際観光基地クイーンズタウンのワカティブ湖畔を午前9時20分に出発したガイドウォーク専用バスは、約3時間でニュージーランド第2の大きさを有するテアナウ湖畔に。ホテル・ヴィラで昼食と合同写真を撮る。参加者は地元の観光会社アルチメイト・ハイクスが募集した40人(ガイドなどスタッフ5人)で、団体もあれば個人参加者もある。オーストラリア人、アメリカ人、ヨーロッパ人、地元ニュージーランド人は個人やグループ参加で日本人の1団体が含まれていた。

同氷河湖東岸を北上する。ブナといっても日本のブナ帯にあるブナとは樹皮

や木の葉がかなり違って見える森林を抜け、氷河堆積物のターミナルモレーンが分布する草原を過ぎて40分で船着き場テアナウダウンズに到着。時速100kmで日本と同じ幅の普通道路を走るバスは速い。

ダウンズといっても街や建物がある場所ではない。船が発着する栈橋と100人乗り程度の船が一艘あるだけの湖岸でしかない。ここから渡し船でテアナウ湖北岸のグレイドワーフまで1時間以上のテアナウ湖船旅。湖北岸がワーフだ。

船で到着したワーフからいよいよトレッキングが始まるのだが、最初の日は湖岸から宿泊地グレードハウス（こちらでは小屋のことをハットとかロッジとも呼ぶ。グレイドは谷底の平地の意味だとガイドから説明）まで僅か1.2km。15時30分には小屋に到着した。

平屋の山小屋はクリントン川の低い河岸段丘上にゆったり建っている。部屋は4人ないし2人にシェアされたベッドルーム。マットと上下布団はあるがシーツは利用者自身持ち込むことになっている。絹製の軽く薄い袋状のパッドやスリーピングバッグのインナーを利用している人々が多い。

ベッドパッドやリュックザックなどはクイーンズタウンの「アルチメイト・ハイクス」会社で無料貸し出ししているが、重いしかさばるもので敬遠されがち。

マサコという日本人ガイドが日本人参加者に「ネイチャーウォッチング1時間ぐらいいかがでしょうか」と誘う。

近くの展望の利く山まで歩き、植生や小鳥、地形などを憶えてもらう仕組みだ。午後5時にならないとバーが開かないから、ワインもビールも飲めない、散歩でもしよう、という嗜好。バーといっても飲み物、食品の販売カウンターのことである。

王冠シダ (Crown Fern)、イースターラン (Easter Orchid)、銀ブナ (Silver Beech)、Tutu の実など紹介された。

マサコはガイドになる前、このグレードハウスで5年間働いた経験をもつ。側を流れるクリントン川で釣りが出来る魚、出来ない魚、トイレ施設のないところでのトイレの仕方、ガイド付き登山者用山小屋の特徴と個人登山者の使う山小屋との違い、明日以降の山歩きをする上での注意など話す。中身についてはおいおい記述しよう。

グレードハウスはニコラスサークを源にして南流するクリントン川がテアナウ湖に注ぐ下流の段丘上につくられた。ヘリポートもあり氷河谷底ではあるが広さは十分だ。

このあたりはいくつかのU字谷が南東に向かって口を開けており、氷河期の氷河が動いた方向を示している。

3月中旬は初秋だが比較的暖かく夕刻の気温は17℃ほど。半袖、半ズボンの人々もいるし夜間に凄く冷え込むこともない。

グレードハウスの食堂や休憩室は広くゆったりしていて山小屋というよりホテルのロビーやレストランの雰囲気、薪ストーブが焚かれていた。ビールやワインの専用カウンターがあり、売れ筋を見ていると白ワインとビールの愛好者が目立つ。ワインは1本2000円程度と割高だがボトルで飲む人々が多い。

ニュージーランドは北島も南島もブドウ地帯が卓越しておりワイン醸造は極めて盛んだ。グレードハウスでは南島のネルソンやマールボロのシャルドネやソーヴィニオン、ブランが使われている。ヴィンテージチャートを見ても赤より白の人氣が高いことがわかる。

ビールは南島の古都ダニーデンのスペイツが圧倒的の人気だ。

加えて夕食は、洋食のフルコース、ボリュームもたっぷりで味もいい。メインディッシュは魚や肉が中心でさながらにしてホテルの気分を味わえる。これらの料理は若干名の専門料理人とガイドによって提供されている。共同ではあるが清潔な水洗トイレ、シャワーが設置され、洗濯場と乾燥室が備え付けられている。

洗濯機はないから自らの手洗いになるが強力なジェネレーターによる熱風を送り込む乾燥室は洗濯後の衣類、下着など2時間で完全乾燥させる威力を兼ね備えていた。

フィオールドランドは多雨地帯であるから、急速乾燥室の存在はトレッカーにとって最もありがたい装置である。

ガイド付きトレッキングハウスに隣接して個人歩き（インデペンデント）のハウスがある。ベッドルームと食事作りのためのプロパンガスコンロ（ガス付き）や料理台が備え付けられてあり、スペースは比較的広い。そして水洗トイレは付いているがシャワーや洗濯場、乾燥室のサービスは受けられない。ビールやワイン、食料などガイド付きハウスから買い付けることも不可能になっている。個人歩きの人々は、ガイド付きの人数と同じ40人が毎日許可され、入山料を支払ってミルフォードトラックに入ってくるが、ガイド付きが大名登山であるのに対して個人歩きは値段相応のサービスしか受けられない。インデペンデントの入山料や施設使用料などは食事や布団、乾燥室のついているガイド付

きに比べ10分の1程度であり、個人歩きの人々はそれで当然と言う感覚だ。

夕食が終わると、休憩室フロアで明日以降歩くトレイルと主な見所についてのおおよそ30分間、スライド映写説明会がある。これは、毎晩行われた。また、英語で参加者の自己紹介も行われる。

22時消灯。重油式発電器が止まり、非常用灯だけの世界になる。

歩行時間30分、1.2km、標高差10m。

第2日目 本格的なトレッキング開始（グレードハウスからボンポローハット）

起床は6時45分、まだ暗闇で明るさは感じられない。一斉にジェネレーターが回り始め、電気がつき、あたりが明るくなる。ジェネレーターの重油は食料品や飲み物類とともにヘリコプターでハウスまで運ばれてくる。また、ハウスから排出されるゴミや污水处理されたものもヘリコプターが運んで行く。「全ての山小屋やトレイルにあるトイレの汚物は簡易処理され空路運ばれているから、日本の山小屋のようにたれ流しということはない、と説明するのはミルフォード43回目の参加という日本人の木暮さん。

7時からテーブルに並べられた食材のハム、ソーセージや野菜類などでサンドウィッチをつくり昼弁当とする。おにぎりが必要であれば白ご飯をラップで巻けばいい。これは日本人のための食材として用意されたもの。

7時45分から朝食だが、材料はコーンフレークに牛乳のほかパン類が用意される。コーヒー、紅茶、各種ジュースやオレンジ、リングなど果物類も豊富だ。ニュージーランドのリングは、日本のように剪定、摘果して大玉にすることはないから小さい。でも甘みがあって十分美味しい。

クイーンズタウンに近いクロムウエルの街は果樹産地として名高く、そのあたりからきたものだ。

8時30分、クリントン川の谷底をボンポローナハウスに向かって出発する。これからはずっと氷河浸食谷の谷底を歩くことになる。16km、6～7時間の行程だ。

小屋を出て間もなく約50mの吊り橋を渡る。清流がゆったり流れ、1m以上のウナギが見える。この河川はウナギとマスがいるが放流したマスは釣ることは出来るが、古くから住み着いているウナギの捕獲は禁止されている。

U字谷谷底の幅は500mから1kmありそうだが、谷壁の高さも同じ程度あり、函のように急な壁をなしているから谷は狭く見える。

高さ35m、太さ周り10mの赤ブナ樹が道ばたにあり、カメラを向けるひと多し。鬱蒼とした原生林に敷かれた道（トレイル）は両端に水の流れる溝が掘られ極めて歩きやすく整備されている。幅も2m位に統一されている。管理はニュージーランド政府が直轄で行っているから時折見る道工事人夫は国家公務員に準ずる扱いであるという。

しかし、我々を案内している数人のガイドは、国の許可を得て、委託された観光会社社員であり、国の施設を借用して商売をしていることになるのだ。

メイントレイルからやや左に反れた先に大きなマーシュ（湿地）があり、ここは独特の湿地植生で覆われている。木道が敷かれ、案内板を通して植物分布を知る仕組みだ。

クリントンハウスでトイレタイム。ここは個人ウオークの人々の小屋で中は清潔でよく整頓されている。

建物の屋根に2組のつがいのキア（カラスぐらいの大きさの鳥で鳴き声がキアと聞こえるからつけられた）が戯れている。誰かが Make a Baby と冷やかす。

もう1つ、よく目立つファンテイルという小鳥がいる。しっぽが扇のような形にそばだつことから命名されたようだが、この付近に多い蚊の一種サンドフライを食べてくれるから人様は助かる。サンドフライは日本の蚊のように大きくないし、声も出さないし、動いていれば刺されないが、立ち止まっていると刺されることがある始末の悪い蚊なのだ。

日本で使う虫除け剤では役に立たないから、現地でも専用の薬剤を購入する以外にない。

キアに限らずニュージーランドの鳥は人なつっこい。天敵がいらない上に人が銃で撃たないからだともいわれる。

トレイルを歩いているとロビン（コマドリ）が寄ってきて靴の上に止まる。好奇心が旺盛というか、度胸がいいというか。

ヒレレ滝小屋で昼食だが、ガイド達は先回りして小屋でお湯を沸かし、コーヒー、紅茶、スープの提供、ジュースや果物などウォーキングの人々に振る舞う。

小屋の側を清流のクリントン川が流れ、ウナギやマスの泳いでいる様子がくっきり浮かぶ。清流の感じは北アルプス上高地の梓川源流近くに似ていると思ったが、クリントン川は梓川ほど急流ではないし、梓川では魚の存在など見える

ことはない。上高地付近の梓川谷底は10km程度にわたって幅広い河床が広がっていて一見クリントン川の河床に似ているが成因が全く違う。上高地は上流部の唐沢には氷河カールがあるが上高地あたりは雨食によるV字谷底に土砂が埋積したものだ。クリントン川は氷河浸食によるU字谷とは成因は異なる。

15時45分、ポンポローナハウスに着いた。この付近は平地が少なく小屋は3列にして階段状に斜面を利用して建てられている。部屋は2～4人用個室。

この日歩いた距離は16km。快い疲れを癒す前に、洗濯とシャワーをしておかなければいけない。洗濯物を干す乾燥室は強力なジェネレーターのためか、強い熱風が吹き付けている。17時からバーが開く。ミルフォードトラックの5日間の支払いはすべてつけ。最終日にミルフォードサウンドのマイターピークハウスでカードないしキャッシュで支払うことになる。

私は、スーヴィニオンかシャルドネの白一本とビール2缶が毎日の酒量だ。少々多いがこのワインは悪酔いしない。

19時夕食、22時消灯。これはどの小屋も同じ。

歩行時間7時間、歩行距離16km、標高差200m。

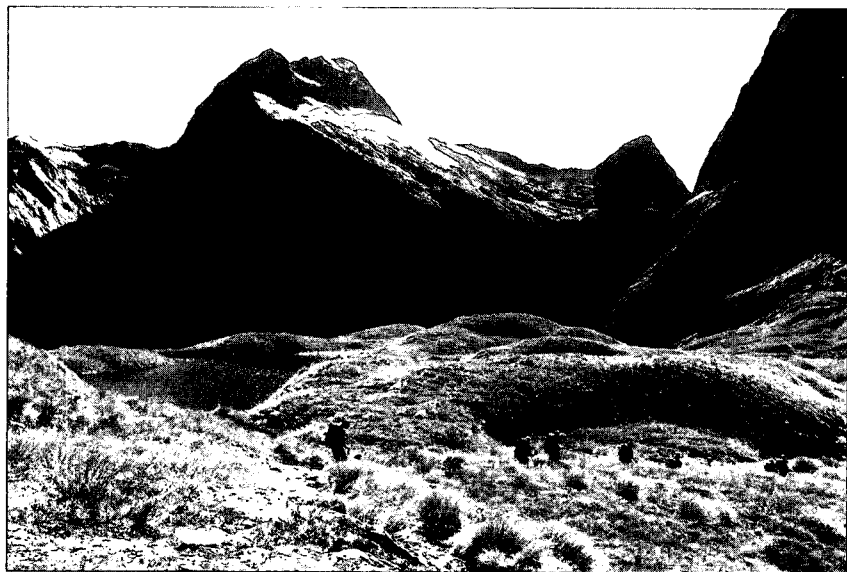
第3日目 マッキノンパスに向かう（ポンポローハットからクインテンハットへ）

6時半起床、ハウス内にあかり灯るとラウンジには暖かい飲み物が用意されている。6時半から各自昼食のサンドウィッチづくり。山では常に遭難時に備えて一食分余計に準備するのが鉄則だがその必要はない。トレイルの途中で熱い茶やコーヒー、茶菓をガイド達が用意し、提供しているからだ。遭難に対してもヘリコプター対応が可能だ。ガイドは前方に1人、中間に1人、後方確認が1人は必ず配置されており、トレッカーはその間を歩いているに過ぎない。団体で歩くのではなく、各自思い思いのスピードで行くから個人歩きと変わらない。

朝食を済ませて後片付けもせず、7時半出発。この日はトレッキングのハイライト、標高1154mのマッキノン峠を越える15kmのコースである。

ミルフォードトラックは短絡的にいえばテアナウ湖から北西にクリントン川を詰めてマッキノン峠を超え、アーサー川に沿って南東に下り、ミルフォードサウンドの海に到達する55kmのトレッキングコースをマル4日間かけて歩くというもの。

三段滝のセントクインテンフォールを左手に見ながら進む。



ミルフォードトラックはクリントン河谷とアーサー河谷を歩く山旅。中途にあるのがこのマッキノン峠（1073m）で氷河の山や氷河湖を楽しむ。



ミルフォードトラックの山道を修復する作業員。ニュージーランド政府観光局の指示で行われている。水を流す側溝がトレイルの両側にある。

キキョウ科のブルーベルやワインベリーの植物を眺めながらブナの林を歩く。キアやロビンの鳥達に出くわすことは珍しくない。ミンタロ湖のあるトイレ休憩所のミンタロハットあたりから鬱蒼とした樹林帯が低くなり U 字谷の全貌がはっきりと見えてくる。迫る水食谷の谷壁に細い筋状の滝が幾筋も見えるが雨になればもっとその数は増えるという。いよいよ 3 km の登りジグザグ道を歩いていくと景観は一気に樹林帯から高山帯に変わる。

マッキノン峠は1888年このトラックを開拓したマッキノンとミッチェルを讃えて命名され、記念碑が建てられている。また、テアナ湖湖畔に銅像がある。氷河を残すサザンアルプスの山々が展望でき、高山植物が多い峠だが 3 月中旬のこの時期見られる花はキク科のマウンテンデイジーやウーリーヘッド、マメ科のネイティブブルーム、リンドウ科のジェンセン、イチゲと称されるフォーステラくらいでこの地域を代表するマウンテンクックリリーやイエローマーガレット、サウスアイランドフォックスグローブなどは残念ながら花を落として見られない。マオリオニオンやパイナップルスクラブは花を落とした残骸を骨格として留めていた。

日本で言うツツジ科のシラタマノキによく似た花粒やオオバコ科のラージフラワードヒービーなどもあった。

峠はアーサー川とクリントン川の分水嶺になっているが多くの池塘がある。

バルーン山、エリザベス氷河、クリントン川の源流部にあたるニコラスサークが目前に迫る景観は何とも雄大の一語に尽きる。

マッキノン峠から標高差1100m下のクインテンハウスが見え、それに続く葛折の山道が展望できる。ハウスには以前使っていた簡易飛行場 (Airstrip) の滑走路が付随していた様子も伺える。峠からハウスに下る山道は氷河を抱くバルーン山の裾を巻き込むように出来ている 6 km の急峻な下りであるが切り立った断崖、多くの滝、苔に覆われた景色などコース一の絶景と言われてきた。

峠の鞍部に峠小屋 (Pass Shelter) があり、そこで展望を楽しみながらの昼食。トイレは天水を使う簡易水洗。途中まで流し、簡易処理して残滓物はヘリで下界に運ぶ。

昼食は持参したサンドウィッチやおにぎりだが、ガイドから熱い紅茶、コーヒー、スープが振る舞われる。

氷河で削られたいくつもの尖峰とサーク (カールを大きくした源頭谷)、U 字谷や 2 段のリンゼイ滝の美しさに見とれながら下り、ローリングバーンとい

う吊り橋を渡ると間もなくアーサー渓谷が広い沖積地を抱く谷底に出る。多くの渓谷美と滝を見せつけるように溪流に沿って木道を階段状に配置する感覚は、憎らしいほどの演出である。

クインテンハウスに到着だ。

山小屋のラウンジにはピアノがあり、早速トレッカーの1人が弾き始める。山小屋に2台のピアノがあったが1台は壊れていて使えない。

夕食前、歩いて片道45分のところに世界第5位の落差540mのサザーランド滝を見に出かける。

クインテンハウスから西に2km坂道を上り詰めたU字谷の壁に巨大な滝が姿を現した。

サザーランド滝の上部は、滝壺付近から見るとは出来ないが地図上では標高980mに湖面をもつほぼ円形の巨大な氷河湖オーイル湖から流れ出す水が三段に跳ね返って落下してくる。日光の華厳の滝が98mだからその6倍、水量も華厳を遙かに超える。イグアスやナイアガラのような横幅はない。上段部分248m、中段部分229m、下段部分103mと表示されている。

滝の名前は、発見者のサザーランドにちなんでいる。滝壺の裏側に回り込めるといので7人の勇敢な人々が本格的な雨具で身を装備し、3段目の滝の落下地点の裏側に出かけた。ガイドはけが人が多いからあまり薦められないというのだが。

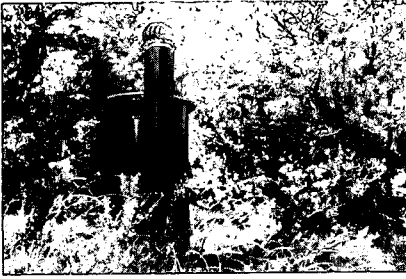
戻ってきた人々に感想を聞くと「バケツをひっくり返すというがそんなものではない。気絶しそうな水圧と騒音で隣のひともまったく見えない」とひとこと。滝の落下地点では命も助からないだろう。

サザーランド滝の全貌を写真に収めるのは難しい、各段を切り離して撮ることになるほど身近では構図になりにくい。

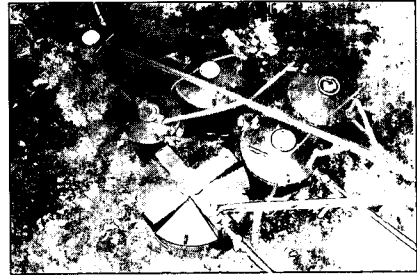
翌日、ミルフォードサウンドの飛行場からサザーランド滝とオーイル湖をヘリコプターで空から見る催しが行われ、何人かは参加した。10分で1.5万円。カードで払えるというから空中散歩したひともいた。

オーイル湖の命名も滝に沿って高さ600mの岸壁をよじ登り湖を発見したオーイルの名を宛てた。

この日は、マッキノン峠の360度大展望といい、サザーランド滝といいミルフォードトラクトレッキング最大の見せ場を歩いたことになる。また、峠まで標高差800mを登り、標高差900mを下る典型的山岳歩きの1日だった。



ミルフォードトラックの簡易トイレ。



トイレの汚物は簡単な処理をしてヘリコプターなどで下界に運ばれる。

歩行時間 8 時間、歩行距離15km、標高差900m。

第4日目 キンテンハウスからマイターピークロッジ

キンテンハウス出発は6時30分。行程が長いから暗いうちに出発する。7時30分にはタン布林ハットでトイレ休憩。この小屋は個人ウオークの人々の宿。途中、サザランド滝が遠望できる。さすが巨大だ。580mの高さは周囲から際だっている。

この日の行程はアーサー川に沿って山を下る22kmのコース。U字谷にかかるとマックイ滝、ジャイアントゲート滝、ベルロックなど景勝地を通過しながら赤ブナの原生林をひたすら終点のサンドフライポイントに向けて歩くだけだ。

だが、見所は多い。赤ブナを主体とした原生林の中はコケ類、地衣類、シダ類の原生植物で覆われている。アーサー川のU字谷こそ約1万年前の最終氷期と若いのが、この原生植物は遙かに古い、数千万年から数億年の単位で生きてきている。その鬱蒼とした森はニュージーランドで最多雨地域であるフィオールドランドに息づいている。6000mmは東京の年間降水量の3～4倍に達する。この雨こそが森を育てているのだ。

一方、地形的に氷河浸食谷が多いため壁への植生の付着が悪く、肌地が多い。またいくらかの土壌が成長して壁に木立や野草地ができて木雪崩（Tree Abalanche）を起こし、斜面が岩肌が変わっていく。木雪崩の跡はトレッキングトレイルのあちこちで見ることが出来たが、沢を埋め巨大な崖錐状になって道を塞いだ最近のもの2カ所拝見出来た。見事な事例はミルフォードサウンドで見ることができる。

この地形は地滑り（Land Slideng）でもあるが、生々しい堆積物の上を幅

100m程度の新しいトレイルが出来ていて扇状地状に盛り上がった土地を歩く経験ができる。

クインテンハウスから9km、ポートシェッド小屋でティー休憩。ガイドによってコーヒーや紅茶が提供されるのはいつもの通り。

崖から谷に流れる川が多いから頻繁に吊り橋や木橋が現れる。橋の上は滑り止めの金網やゴムマットが敷かれているし、吊り橋の両横フェンスも大抵金網がかけられ通行の安全が期せられている。吊り橋によっては通行人数に制限を加えてある場所もあり、多少の待ちが入る。

マッカイ滝は3段の小さなものだが、大きなロックが滝の走行を変えており奇妙に美しい。そばにベルロックという岩場があり半鐘状の高さ3m空間が出来ている。なかで立ち上がると脚の部分だけ外から見えるので写真を撮る人が多い。

参加者は40人と多いが一緒に歩くことはなく各自持ち前のペースで歩くから、前後の人々に滅多に会わない。ましてやミルフォードトラックは一方通行で逆から来る人はいないから単独行動している錯覚に陥る。休憩所で人と出会う以外は、追い越したり立ち止まったりするのはガイドくらい。

昼食はこの日18km地点のジャイアントゲート滝壺付近。12時50分。この日はクインテンハウスで昼食のサンドウィッチをつくったがリュックに詰め入れるのを忘れ、一昨日以来の予備食として持参していた菓子類やリンゴなどで済ませた。予備食がこんなところで役立つものだ。

昼食後はアイダ湖を右手に見ながらひたすら終点のサンドフライポイントを目指す。この湖はアーサー川の下流にあり、既にミルフォードサウンドという湾の最奥に位置して繋がっているように見えた。フィオルドの奥深くに取り残された湖だ。

この日は22km、初日のグレイドハウスから通算して55kmの山岳歩行は23時間30分サンドフライポイント小屋で終了した。

ボディの下半分が赤く、上半分が白い運搬船が船着き場にやってくる。ここからミルフォードサウンドのマイターピークロッジまでは船で30分程度。

外にいとサンドフライという名の藪蚊に刺されるから、船に乗り込む。船の出発は15時15分と16時と表示されているが、全員集合したとみて15時丁度に出発。個人ウオークの人々も乗船することができる。

船はミルフォードサウンド船着き場に到着するとバスで1分、歩いて10分

以内のマイターピークロッジに到着した。この宿は著名な観光地ミルフォードサウンドにただ1軒のホテルだ。この地区はほかに軽飛行場、船つき場くらいの施設しかない。

鍵を渡され1人部屋、直ぐに洗濯するがここには山小屋のような乾燥室はない。部屋の中に干さなければならぬ。17時からと書いてあるがそれ以前からバーは開いている。このホテルはヘリや飛行機で食料を運搬する必要がない。きちんとした自動車道路がテアナウからホームートンネルを経由して通じているが、アルコールの値段はこれまでの山小屋と同じだ。

日本人参加者が全員1つのテーブルについて夕食をとった。リーダーと案内役を務めたのはミルフォード43回目という木暮さん。彼は元ニュージーランド大使館勤務経験のある方でニュージーランド情勢だけでなくミルフォードトラックについても良く知っていた。しかし、普段はガイドと一緒に食づくりなど作業をしていたらしく減多と一緒にならなかった。

夕食後、完歩証を手渡す儀式が執り行われ、英語で挨拶するよう指示がある。

40人の参加者がいたが名簿は配られない。最後にメールや手紙交換などで住所を任意に書いた名簿で国名を拾い出すとオーストラリア12人、日本11人、アメリカ7人、ニュージーランド7人の37人が判明した。残り3人は名前を書き忘れたか、書きたくなかったか、名前を書いても国籍を表記しなかったか、どこの国の所属か、わからない。

日本人参加者は60歳位で定年退職した夫婦や山好きなひとが多く、8人はエージェントが募集する団体客、2人はハワイ在住と東京在住の主婦、それに単独参加の私の11人だったが、日本人の参加者が10人を超えていたことから山歩きガイドはマサコという30歳位の日本人1人が付いた。

参加者は年齢のわりには山歩きが早く、日頃山に慣れ、親しんでいる感じ。ヒマラヤ7000mの高峰に登頂した経験の持ち主もいた。日本人は早く歩くことが先に立ち、外国人のようにゆったり景色を楽しんだり、時間の経過に余裕をつくる習慣がないことが改めて感じられた。

歩行時間8時間、歩行距離21km、標高差250m。

第5日目 ミルフォードサウンドの船旅（3月17日）

マイターピークロッジでは5日分の各山小屋で飲んだビールやワインの精算をした。

ロッジにはカメラ用バッテリーが置いてあった。カメラが雨に濡れ動かなくなって電池を取り替えた。900円を支出したが、結局カメラは動かなかった。

2台のカメラが旅の必需であることを改めて感じる。

山小屋の酒類の値段は街のリカーショップのおよそ2倍だが、ヘリコプターで運搬することを考えれば高いとはいえない。かつてはトレッキング代に含まれていたアルコール飲料代も今では有料化された。

最終日はウォーキングはなし。船着き場から大型ボートでミルフォードサウンド（湾）を抜け、タスマン海に出て再び戻る1時間40分の船旅を楽しむだけである。これはトレッキングのオプションともいえる。

フィオールドランド国立公園のなかでミルフォードサウンドのようなフィオールドを探してみれば16カ所を数えることができる。そのなかでミルフォードサウンドが名高く、景勝地として観光客を多く集めているのは、自動車道路が湾の入り口に通じているからである。1934年に開始されたミルフォードサウンドとエグリントン谷の間に横たわる標高2700m級のダーラン山脈を切り抜くホームートンネル工事は20年の歳月をかけ54年に完成した。これでテアナウとミルフォードサウンドは道路で結びつき観光客を呼び込むニュージーランド有数の観光地になったのである。しかし、今でも幅は狭く1車線通行のままで待ち時間がかかる。

他のフィオールドは陸路がなく、船によって海路で近づく以外行き着く方法がない。

船からの見所と言えば、ビジターセンターのボート乗り場に近い落差160mのポーエン滝と155mのスターリング滝。海からそそり立つ山としては世界一高いマイターピーク（標高1682m）の尖峰、氷河を頂くペンブロック山、それに岩肌に棲息するオットセイ（ニュージーランド・ファー・シール）、ブルーペンギン、イルカなどの動物たちなどである。

フィオールドランドは太平洋プレートとオーストラリアプレートの境界上に位置し、その合流点にできた。ミルフォードサウンドで太平洋プレートの上の地層が隆起して形成されたのがサザン・アルプスである。つまりオーストラリアプレートが太平洋プレートの下に潜り込んだ高山断層なのである。

従って深成岩の露出した花崗岩を基本とするが、ミルフォードサウンドの地圧によって形成された部分は片麻岩など変成岩が多いことでも知られている。ホームートンネル付近の岩盤は花崗岩でミルフォードサウンドとはやや異なる

のだ。

200万年前から始まった氷河期にフィオルドランド一帯が厚い氷河に覆われ、間氷期との間で何度も氷河の前進と後退が繰り返され、U字谷や Glacial Station (岩が氷河によって押し出されたときの筋) が形成されたのである。

サウンドはフィオルドと同義に使われるが、フィオルドは氷河浸食谷の氷河後退の後、海水が入り込んだもの、サウンドは川沿いの谷に海拔の上昇や地盤の陥没によって海水が入り込んだ入り江を指す場合使われる用語だ。

バスはテアナウに向けて11時出発。46人中10人程度はミルフォードサウンドからヘリコプターでクイーンズタウンに向かった (料金は470NZ\$ = 26000円で30分。バスでは5時間で料金はトレッキング料金に含まれている)。

途中バスのなかで朝各自が製造したサンドウィッチを食べ、13時テアナウに到着。

私とオーストラリア人のシムキン・レズリーとクリスティ・トレーデの女性2人は明日からのルートバントラック参加のためホテル&ヴィラ・テアナウに宿泊のため途中下車する。

ホテルに隣接する今回のアルチメイト・トレッキング事務所で日本語版ルートバントラックのビデオを30分程度見た。

その後、ホテルにチェックイン。ヴァウチャーなしでオーケー。

このホテルは5つ星の2階建て、日本の皇太子と雅子さまが宿泊したとされ、2人の写真が館内に飾られてあった。

歩行なし。

第6日目 テアナウのホテルで休養

ミルフォードトレッキングを終え、ルートバントラックに繋ぐメンバーはオーストラリアの女性2人と私の3人のみ。テアナウの「ホテルヴィラ」に投宿、翌日クイーンズタウンからデバイドに向かうバスを待った。

第7日目 ルートバントラックトレッキング (デバイド～マッケンジーロッジ)

ミルフォードトラックは基本的に谷歩き、クリントン川の谷底を遡り、マッキノン峠を越えてアサー川の谷底を下るフィオルドランド国立公園内の4泊5日の山歩きであるのに対してルートバントラックはマッケンジー湖からハ

リス峠を越え、ルートバーン滝に至る比較的展望の良い山岳地域を歩く2泊3日、40kmの旅だ。雨さえなければ景色の開ける山腹や峠部分を歩くから日本の山歩きに似ているともいわれる。しかし、ここは年間降水量6000mmの世界だ。3日間雨はあっても、雨に当たらない日はないとも言われる多雨地帯。日本の雨量の4倍以上ある。

コースはフィオールドランド国立公園を北上し、マウントアスパイアリング国立公園を合計40km(約17時間)、3日間で歩く。変化に富んだ自然景観と山岳展望が魅力で雄大な高層湿原や湖沼、氷河地形が臨まれる。

3月18日、バスはクイーンズタウンを6時55分出発し、テアナウに9時半着。しかし、私はテアナウから乗り込んだから10時半出発する。その間集合写真を撮ったり、コーヒータイムを過ごすのに1時間。

バスはテアナウを北上し、ミルフォードトサウンド方面との分岐点デバイド(標高532m)まで80km、約1時間。分岐点には小屋があり出発の準備の前に、参加者はサークルになって自己紹介だ。名札は配られるがファーストネームのみ。出身地や趣味など話す。合計14人のトレッカーにジョシュア、ケートリング、キヨミの3人がガイド。いずれもニュージーランド在住の若者たちだ。日本人参加者は徳島のフィットネスクラブインストラクターのキミコ、ニュージーランド政府観光局のセツコ、リコーカメラ新横浜のヤヨイ、東京のカメラマン(山と溪谷社)ヒロシと埼玉県の中理科(地質学)教員のヒロシと私の6人。30代~50歳代の人々を中心だった。日本人が一番多く、次いでアメリカ4人、オーストラリア3人、ニュージーランド3人、イギリス1人、ガイド3人も含む。

今回の日本人参加者は個人ばかりだから、ことばが良くできて日本人だけかたまる光景はあまり見かけない。

ミルフォードトラック、ルートバーントラックとも70歳以上は原則認めないが最近の歩行実績と医師の診断書によって許可されたのは71歳の私のみ。10歳以下もだめだ。

途中歩行困難になった場合のヘリコプターや救助隊員の手配などを極力避けるためである。

自己紹介が終わると配布された弁当をリュックに詰め、デバイド峠を出発。銀ブナの林を3km(50分)進むとキーサミットとの分岐点、リュックザックをデポして最初の展望台に向かう。樹林帯を抜けて高層湿原台地に出ると一気に

展望が開けキーサミット山頂（920m）に着く。ここはリビングストーン山脈の最北に位置し、360度見渡せる景勝地だ。

キーサミットは3つの分水嶺にあたる。北流するホリフォード川でタスマン海へ、南流してワカチプ湖に注ぎ、その後東に流れ太平洋に注ぐグリーンストーン川、そしてテアナウ湖に注ぎニュージーランド南島の南太平洋に流れるエグリントン川。これらの谷を眺めることが出来る。巨大なU字谷に繋がる小さなブランチ状の谷が整列しているのは氷期の違いと氷河の走方行を示している。

大小の池塘が点在し、湿地植生と風雨に晒された木々に宿る茶褐色の地衣類が木肌を隠すほど絡みついている。これはゴプリンモス（妖精の苔）というらしい。このあたりはライケン（地衣類）やモス（コケ類）、フーン（シダ類）の宝庫である。

また食虫植物のモウセンゴケやタヌキモも自生していた。

U字谷に流れるグリーンストーン川の最奥部に氷河湖ハイデン湖が横たわり、その先は氷河を頂いたジェーンバッテン峰（2012m）が雲間にピークを覗かせている。

西北方向には標高2700mを越すツトコ山を擁すダーラン山脈が横たわっている。

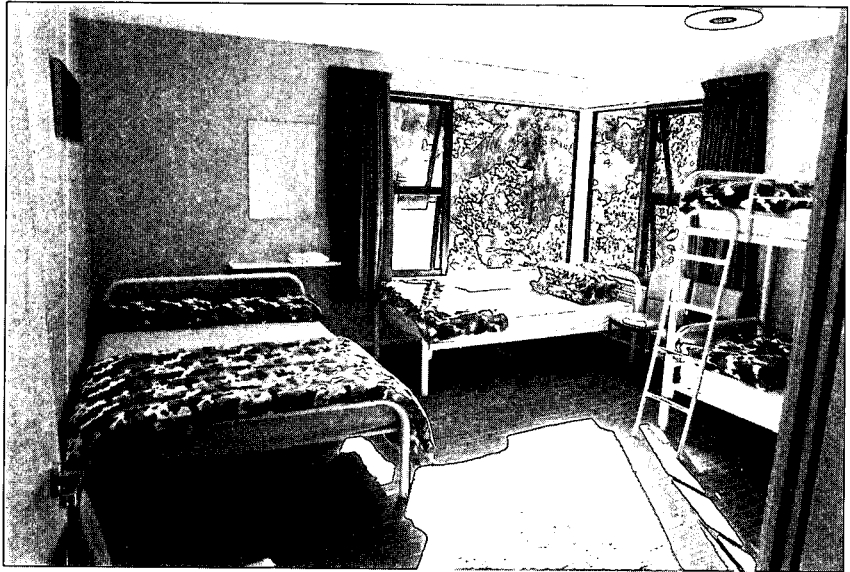
3月中旬のニュージーランドは初秋、湿原植生は茶褐色に変化し、風もなく暖かい高原の空気に包まれていた。

分岐点に戻る。ガイドの1人がデポした荷物の安全確保のため行き、下りてきた参加者に道案内をしている。至れり尽せりのサービスだ。

分岐点から15分下るとハウデン小屋に到着。先ほどキーサミットから眺めた氷河湖ハウデン湖畔に個人ウオーク用の小屋があり、そこでガイド達がコーヒー、紅茶、スープなど温かい飲み物を提供してくれ昼飯だ。湖畔の草原でゆったり食事をするひとびと。われわれのパーティー以外はひとがいない。

深いU字谷のハウデン湖出口は幅の狭い小川のせせらぎでやがてグリーンストーン川になってワカチプ湖に注ぐ。この川筋もトレッキングコースでマッケーラーハロッジやスチールクリークロッジがあって2泊3日のU字谷谷底歩行が可能だ。

ハウデン湖からは北に湿原の木道を歩き銀ブナの樹林帯に行く。このあたりには各種のオーキッド（ラン）があるはずだが3月は初秋、花は既に終わっている。ランの花は有名らしいが咲いていないのでどれかは特定できない。やが



ルートバートラックのマッケンジーハットの寝室。4～5人部屋。上下シーツは使用者が持ち込む。

て、見所の1つ80mのイヤーランド滝が出現する。水量は少なく迫力には乏しいが優雅さがある。若い白人女性が滝壺に近い大きな石の上に寝そべて休憩している姿が滝とマッチして美しさを増幅する。滝の斜面はツリーアバランチ（木雪崩）の跡のように見えたがガイドの説明は断層によるもの。火山堆積物が硬い砂岩で圧せられ移動したという。滝を過ぎるとツリーアバランチの跡が何カ所も出てくる。U字谷の壁は急峻でかろうじて植生で覆われた場所も木雪崩にあってはひとたまりもない。えぐり取られた裸地が急傾斜面をつくり、残滓物が谷底に崖錐を形成している。

15分ほど登って下りるとそこはマッケンジー湖畔に建つマッケンジーロッジ、15kmを4時間で歩いたことになる。ここはルートバートラックの第一日目の宿泊場所だ。

建物は昨年オープンしたばかりの真新しい上、設備も近代的、山小屋としては全体としてゆったり感がある。ロッジへの到着場には水とオレンジ、リンゴなどの果物がウェルカムフルーツとして置いてある。憎いほどの心配りだ。マッケンジー湖を散策するひともいれば、シャワーを浴び、洗濯を済ませて早速ビールやワインに舌鼓を打つひともいる。

ラウンジには飲み物のつまみとしてハムやソーセージ、チーズなどが用意されていた。建物内のラウンジやレストランも広々しているが、建物に続くウッドデッキが夕日を受けて静寂な空間を演出しているから大自然の懐に癒されるにはこの場所がいい。何と言ってもトレッカーは14人しかいないので、自然の大きさに比べ人の存在が小さく見える。

ディナーは洋食のフルコース、ホテル並のサービスだ。メインディッシュは肉と魚が選択できる。贅沢の限りを尽くす山小屋の夕食だった。政府観光局が立ち上げたブランド商品のなかでもクオールマークの品質保証が付いたものであろう。

歩行時間5時間半、歩行距離14km、標高差200m。

第8日目 サドルとコニカルヒル（マッケンジーロッジからルートバーンフォールロッジ）（3月18日）

早朝7時半、マッケンジーロッジを出て北のハリスサドル（1277m）に向かう。まだ夜が明けたばかり。氷河湖マッケンジー湖の急峻な壁をジグザグに登り始める。標高差600mを登り切ると爽快な山岳展望が開けるオーシャンピークコーナーだが、坂道の途中から雨足が強まり、視界が利かない。雨も豪雨とはいえないが濡れが著しい。フィオールドランド多雨の一端を見たような雨足。1台のカメラが雨のため動かない。シャッターが下りないのだ。もう1台のカメラは手ぬぐいにくるみビニール袋に入れて手にもつ。600mを登り詰めると平坦な山腹沿いの道を行く。晴れていればダーラン山脈を越えてタスマン海が臨めるし、ホリフォード渓谷も見えるはずだが全体がガスに包まれた状況だ。道の両側は既に高山帯で背の高い樹木はなく花畑や草原のようになっている。

このルートで最も美しい山岳景観が楽しめる筈のトラックは雨でお流れだ。しかし、ここは年間5000～6000mmという多雨地帯、雨に当たらない方が珍しいとも言われる。気温も低下して体感温度はかなり低下し、寒く感じた。

やがて標高1260mのハリスサドルと呼ばれる峠小屋に着いた。中から鍵がかかる仕組みで個人ウオークの人々は使えない。トイレも鍵はガイドが管理している。小屋の中はプロパンで湯が沸かされ、暖かい飲み物が配布されているから暖房がなくても暖がとれる。

寒い雨の日、個人ウオークの人々にも解放する位の度量があってもいいと思うが、そこは規則だという。

ゴアテックスの雨具にコウモリ傘をさしていてもかなり雨が体に浸透している。リュックの中は厚手のビニール袋にくるみさらにリックカバーで雨の浸透をしのいだがビニール袋に入れずリュックの背に近い部分に挟んで置いた書類は濡れてうまく剥がれなかった。ちょっとした不注意で重要な紙類を濡らしてしまう。時折雨足が弱まるが、展望が利くのは僅かな距離だ。

ハリスサドルから北側に聳えるコニカルヒル (1515m) はルートバーントラック随一の展望が開けダーラン山脈最高峰のツトコ山 (標高2746mでエヴェレスト初登頂のサー・エドモンドヒラリーも登った山) を含む360度視界が開ける場所と聞いていたが雨でガスが発生しているため往復1時間半の大展望は諦めた。

サドルを越え、幾つかの池塘が点在する凹凸の激しい草原を行くと、氷河湖で菱形のハリス湖が眼下に現れ、その壁を割り抜いてつくったトラックを歩くことになる。展望はよいが足下が物騒で冷や汗をかきながら岩場に近い方をゆっくり進む。雨で足場が滑る。崖を削ったトレイルだから右は上に急崖、左は下に急崖で1人分の幅しかない。

ハリス湖の北側最奥には2筋の滝がながれ、その奥にはハリス湖とおなじくらいの面積の細長い氷河湖が横たわっている筈。地図上はそうなっているが実際には見通しが利かず確認できない。

湖東側の谷壁にも7筋の細い滝が流れ落ちている。これらは雨が降ると植生のない岸壁は素早く滝に変化するのだ。

ハリス湖の出口までは高巻きの岩盤で形成された細い山道を歩くことになるが周囲は絶景とっていい。晴れていれば迫力の景観が見られたのであろう。

菱形の湖岸の南に出ると湖口がありそこから勢いよく湖の水が流れ出すが幾つものせせらぎや滝になって下流に流れ下る様子がよく見られる。周囲には樹木はなく、岩盤と草地在りなす極めて変化に富んだ地形を流れ落ちる独特の景色。平行する長い下りの山道も展望でき、キク科のイエローマーガレットやマウンテンデイジーの咲き残りを拝見することが出来たが、この地帯に咲く名花キンポウゲ科のマウントクックリリーはお目にかかれなかった。この地方でもっとも著名な山野草。やや季節が遅かった。

リリーといってもユリ科ではなくキンポウゲ科に属する。日本にもヒダカソウやキタダケソウなどキンポウゲ科の名花は多い。

氷河堆積物のごろごろした石が点在する野草地の主な植生は、タソックと呼



ルートバートラックのルートバーンロッジの休憩室。トレッカーは夕食前、思い思いの時間を過ごす。オーストラリア、アメリカ、ニュージーランド人など。

ばれる禾本科（稲科）の植物で大地にしっかり根を下ろしている。牧草のようなこの植物は羊すら食にしない代物、嫌われ者ではあるが美しい景色を表現するニュージーランドの代表的野草植物だ。

どンドン下っていくと野草地帯から轟音が聞こえてくる。何段にも、幾筋にも谷をえぐるルートバートラック滝だ。1つ1つはたいした滝ではないが、その集合体としての貫禄はなかなかのものだ。滝に近い斜面にルートバーンロッジがある。2日目の宿だ。15時15分到着。この日はコニカルヒルに行けなかったこともあって到着が早い。

歩行距離は15km、早い人は5時間、遅い人でも7時間でロッジに到着した。

14人のトレッカーにこれだけの時間差があるからトラックを歩いているとき、グループ内の人とも会わない。

ロッジは古く、比較的狭い。昨夜投宿したマッケンジーロッジとはかなり違う。下山途中雨は止んだものの全身が濡れ、小屋でも心なしか寒い。直ぐにシャワーを浴び、洗濯をして乾燥室に干すが、濡れた靴の乾燥が面倒だ。乾燥室に長く置くと反り返ってきて足にフィットしなくなる。こまめに乾燥室に出し入れをしなければならない。

部屋は5～6人部屋で2段ベッドがある。部屋の割り当てはあるが男女混合宿泊施設として使っている。早くロッジに到着した人は下段、遅い人は上段になりがちだ。

夕食前はラウンジでワインやビールを飲んだり、読書や歓談をするひとびと。国際交流も2泊目になるとかなり進む。

歩行時間6時間、15km、標高差400m。

第9日目 ルートバーン川を下る（ルートバーンファールスロッジからルートバーンエンド）

最終日の歩行は10km、3～4時間の行程だ。昨夜は土砂降りの雨足だったが、9時半の出発時刻には雨があがった。取り敢えず急な斜面を下り幅広のU字谷底ルートバーンフォールズ小屋までよく整備された赤ブナの樹林帯を歩く。

1994年1月に起きた木雪崩（Tree Abalanche）で堆積した盛り上がり部分を通る。扇状地のように周囲の地形から木雪崩で堆積した場所が盛り上がり、幅100mほどに渡って新しい山道がつけられていた。上部を見上げると裸地化した急崖が聳えていて、扇状地ではなく崖錐であることがわかる。滑り落ちたとき木肌のむき出しになった倒木が根とともども堆積地の中に散在しているのだ。

U字谷の斜面はもともと土壤が堆積しにくい。ブナの木々は根を網のように絡ませあって成長してきたが大量の雨が降ると根こそぎ流される。1本の樹が流されると絡まっていた木々は一挙に雪崩をおこすというわけである。

昨夜宿泊した小屋はロッジ（ガイドウオーク用）と呼び、3km下流の小屋はハット（個人ウオーク用）と呼んで区別している。

谷底の沖積地はフラットでタソックなどの草原になっていて、そのなかをルートバーン川が分流、合流しながら網状流河川を形成する。いかにも氷河谷らしい谷底に幅のある景観だ。

個人ウオーク用ルートバーンフラットハットには石炭用ストーブが置かれ、食堂とベッドルームがある。天水を溜める大きな缶に、屋根からの塩ビパイプが通じ、やや離れた場所にトイレが配置されている。トイレは簡易水洗だ。昼近くになるとハットにはヒトが誰もいない。

再び赤ブナ樹林に入るとロビンが近づき、尾を扇のように立てるファンテイルも手の届く距離だ。人なつっこい小鳥達だ。このあたりにはキアによく似た

森の住人カカ（鳥）やライフルマン、ベルバードなどの野鳥が棲息している聞いていたが、お目にかかることはなかった。

ルートバーン川底は、時に白い小さな小石が敷き詰められ、流れる水はかすかな陰にしか見えない透明度、谷壁から落ちる滝、何度となく繰り返し渡らなければならぬ吊り橋、そしてルートバーン川の平原に出る。緩やかに蛇行する川の流れがみえる。

昼飯はフォージフラット。河川の敷石に腰をおろし、早朝ロッジで自ら作ったサンドウィッチをほおぼる。

半ズボンに登山靴、上衣は雨具で帽子は冬用の毛糸丸帽のガイド、ニュージーランド在住のキヨミが河原の小石の間に何かを探して歩いてくる。気温は16～17℃というがガイドはだれもが半ズボン、トレッカーに半ズボンのひとはいないからガイドとトレッカーの区別が付きやすい。

途中私が渡った函状の急流河川に4人の男女がヘルメットにライフジャケット、ウェディングシューズでザイル操作して川登りに取り組んでいる。ひどい激流で誰もはずぶ濡れだ。これもツアーだという。バンジージャンプをはじめニュージーランド人はこうした勇敢なアウトドアスポーツが好きらしい。

鬱蒼としたブナの樹林とそれにからまる地衣類や苔類の山中を歩いて行くとあと20分でカーパークの標識。川に沿い、また川を渡り、幾つもの吊り橋を渡って終点ルートバーンエンドに到着した。13時半過ぎだった。

東流してきたルートバーン川が、間もなく巨大なダート川に注ぎ、ワカチブ湖に入る、その出口付近までクイーンズタウン方面への自動車道路が通じている。

ルートバーントラックは出発点がテアナウ湖に注ぐエグリントン川上流のデバイドで、キーサミットを越えてグリーンストーン川に下り、ハリスサドルの峠を越えルートバーン川の谷に出る全長40kmのコースを3日間かけて歩いたのである。

標高差はコニカルヒルに登れば900m弱、ハリスサドルだけであれば560m程度と思われる。アップダウンはあるがニュージーランドのトレッキングトラックとしてはミルフォードトラックと2分する人気の山道だ。

カーパークから14人の参加者を乗せた大型バスはルートバーン川沿いの山道を出ると広大なダート川沖積地に出る。このあたりは羊や牛の放牧地が多く牧歌的だ。

40分ほどすると小さなグレーノーキー集落到に到着、ここで休憩するがビールやワインなど飲んで1時間後に出発した。広大で細長いワカチプ湖の北岸を走りクイーンズタウンのバスセンター到着は16時30分。

18時30からイアール通りのノボテルガーデンズホテルでディナーと完歩証授与があるとの連絡があって解散、参加者はそれぞれのホテルの戻った。

歩行時間 4 時間、歩行距離10km、標高差500m。

Ⅲ 山旅文化の地域差

1) 山旅の先進国型と新興国型

アメリカやニュージーランドはいわば登山先進国だ。先進国の今流山旅は労賃の高さから時にはテント、寝袋、食糧、衣類の全てを自ら持参した山行になるか、豪華な山小屋で食事や寝具を提供され、欲しければアルコールや清涼飲料まで用意されている山行かである。

前者はロッキー山脈ウィンドリバー地域やワサッチ山脈の山旅で、後者はニュージーランドのミルフォードトラックやルートバートトラックの山旅だった。

ヒマラヤやキリマンジャロなど新興国の登山様式は安価な地元労働力に依存した登山形式が一般的でポーターやコックなどが果たす役割が大きい。山小屋かテント生活であるかを問わず食材や共同、個人的装備まで大半はポーターが運んでいく。クッキング、食づくりは同行するコックが整え、提供することも少なくない。キリマンジャロでは2人の登山者に対して1人のガイド、2人のポーター、2人のコックがついたがそれぞれの役割は明確で、お互いに仕事を補完し合うことはない。小屋泊まりでも食事は同行のコックが用意する。登山客に対応するガイド、ポーター、コックの数もほぼ決まっていたトレッキングの認可条件の1つでもある。

ヒマラヤのアンナプルナ山域でも2人の登山者に対しガイド1人とポーター1人がついたが食事は山小屋側が提供していた。ヒマラヤの山小屋は木造や石造りの小規模ホテルの感がある。ヒマラヤは地域によってテント住まい、小屋住まいが決まっているようだ。

両地域ともイギリスが開発した登山ルートが中心だから小屋形式や食事内容は欧州の登山様式が色濃くでている。

例えば、山小屋のテーブルには必ずテーブルクロスを使い夕食を提供する。

夕食は前菜、メインディッシュ、デザートのコース料理で対応。ヒマラヤでは、山小屋が個室、トイレも簡易水洗でベッド就寝の仕方も共通している。

日本のような雑魚寝方式、非水洗トイレは見ることはない。最も最近の北アルプスなどでは水洗や簡易水洗トイレが普及し始めているが日本の山小屋は垂れ流しが多い。

ニュージーランドでは、小屋に付随しないトレイル途中の水洗トイレも見受けられ、汚物は簡易処理されてヘリコプターで下界に運ばれている。また、マウントクック山麓トレイルでは無人の休憩小屋に誰でも自由に使える救急薬品や雨具が用意されていた。

先進国と新興国との間に労賃水準の差があり、そのことが山旅様式の違いを生んでいるほか、登山をどの国が開発したかによっても登山の仕組みや様式に変化が出てくる。

2) ロッキー山脈ウィンドリバー山域山旅は完全内給型

今回歩いたロッキー山脈は、衣食住全てを背負い9日間標高3000～4000mを歩くもの。山旅は荷物の重量が15～25kg、80リットル以上のザックを必要とする。降雪や降霜、雷雨、渡渉も覚悟しなければならない。

この地域に山小屋はない。それどころかベンチや管理人小屋などの施設もトイレもない。

キャンプ場といった標識も見あたらない。構造物は登山道の方向指示標識とたまに鋼鉄製熊よけ食糧保管コンテナがあるだけ。ほぼ同標高のワサッチ山脈にも同じことがいえた。

山歩き日数が増えてくるとガイドも必要になってくる。山道は入り組んでいて迷いやすいし、トレイルが明瞭でない部分もある。トレッカーは地形図とコンパスが必需品となる。

トレッカーには熊とひとが共存する山岳地帯を歩いていること強く認識し、熊に対する用心、注意、対策が徹底している。テントの中に不用意に食糧や食材を放置することは許されない。食材や食糧は頑丈なカニスター（缶）に入れるか、丈の高い樹木の枝に吊すことで難に遭遇しない環境をつくらうとしている。

ヒグマの多い北海道知床半島で2009年夏、若い女性達がテント内に食糧を置いて外出し、熊に食糧を持ち去られたり、20年程前の日高山脈カムイエクウチ

カウシ事件のようにテント内の食糧を熊に取られ、取り返そうとして3人の大学生が熊の犠牲になった事件は、熊地帯に人間が入り込んでいるから危険区域だと認識してないことによる初歩的ミスだ。

今回のワイオミングロッキーの山旅の参加者は自然保護団体「シエラクラブ」メンバーという共通点はあるが、所詮全米各地域から集まってきた人々の集団に過ぎない。山旅の日数が増えると兎角メンバーのストレスは溜まりやすい。それを強力なリーダーシップで束ねるのはリーダーの役割だ。山旅に豊かな経験と実績を持つフランス系アメリカ人メリンダ・グッドウォーターは綿密な事前調査に基づいた行動計画と繊細な食の準備を行い、行動中メンバーから出る異論や不満などは全員の了解が得られなければ実施に移さないなど手際良い指導力を発揮した。メリンダの夫はネパール人のシェルパ族出身で山旅には精通していると聞いた。

3) 用具と機材

登山用具の進歩はすざましいものがある。登山靴や雨具がゴアテックスなど水を通しにくいものに、アンダーウェアや寝袋に羽毛が使われて久しいが、羽毛は暖かいが雨に濡れると効果が薄まるとの理由で、新開発の軽量、保温の繊維が使われていることを知る。

アメリカ人の使用しているテントは天井の開閉可能な両開き方式やフライシートの幅が広くテント本体との間に空間をつくり利便性の高いものなどを利用していた。テントの素材や形式も日進月歩だ。

リュックザックも70~80リットル程度になると腰負担80%、肩負担20%の重量配分にできるようにウエストベルトの材料を頑丈にし、装着や伸縮に合理性を持たせている。特にアメリカ製はその傾向が強い。

ポールは登山用伸縮型2本を全ての参加者が利用していた。ノルディックウォーキング用ポールの利用は私のみだった。登山用ポールはノルディックように比べやや重い、岩登りなどで不必要になれば短縮してザックに収納することができる。それにアメリカはヨーロッパのようにノルディックウォーキングが普及していないということもある。

アメリカのリュック製造会社グレゴリーのパンフをみると、リュックの宣伝用写真はどれもモデルがポールを利用していることから、山旅にポールを使うことは日本より普及している感じだ。

河の渡渉は河の幅、深さ、流れの速さ、川底の状況などで簡単なスリッパ状の履き物からウェディングシューズまで様々あるが、ウィンドリバーの幾つかの河川渡渉は簡易なもので間に合わせた。同行した検事のジュディ・ホダスは川中で転倒し、軽い怪我をした上に履き物を流した。ところによって踏み石が適度な幅で置かれている場所もあるが、アメリカ人の歩幅を前提とした間隔だから、日本人の私には届かず1度河に落ちる羽目になった。渡渉にはストックが必要不可欠だ。

日本で広く普及している炊事用ストーブはブタンガスが使われているが、今回の山旅でメリンダが選んだのは白灯油利用ポンプ式ストーブだった。ブタンガスは空きボンベの運搬が仕事になるからだ。11人分の食事づくりには白灯油利用がうってつけだったのである。

北海道での遭難事故は凍死や道迷いが目立つ。アメリカでは転落死や滑落死などが多いという。日本でも本州の急峻な山々では滑落死の遭難例が多く報告されている。遭難の形態は山の地形や気象条件と関係しているが凍死は装備の問題と不可分に結びついている。

2009年夏の大雪山凍死事故（団体8人、個人2人死亡）は、生還した人々の装備がしっかりしていたことから遭難死した人々の「暖をとる衣類やテント」が問題視された。

山旅は1点の忘れ物、1点の不足品で生死が決まる。

いかなる場合にも命が守れる山旅の訓練は、原点である衣食住の全てを背負い上げる登山から始めなければならない、これが基本という教訓がロッキー山脈登山から得られた。

4) 豪華山旅の典型ニュージーランドのミルフォードとルートバーン山行

ミルフォード（4泊5日）とルートバーン（2泊3日）のガイドウォークは案内が参加者（トレッカー）の先導役ガイド、ばらける参加者の中間地点を歩くガイド、後追い役のガイドが上手くトランシーバーで連絡を取りながら歩き、トレッカーの歩行時間の自由を保障する。ガイドは強力な体力も要求される。倒れたり、動けなくなった人々のために医薬品や固形燃料、湯たんぽや衣料品も持参して、時には最後尾から最前列に急ぎ、時には中間をキープし、歩く人々の状況を知ろうとする。トレッカーは1列で歩いているわけではない。長くばらけ、まるで個人歩行しているのが常だ。

ガイドは途中の休憩地点で茶菓を接待し、ロッジでは食事のサービスや後片付けをする。勿論、途中で山岳地形、地質、植生、棲息する動物や鳥類、水や自然環境維持の国家方針や環境政策を伝えなければならない。ガイドに資格が必要ではないが、専用の旅行社に雇われ、勤務はトレッキング日数に応じて決められ、給与は日給制で支払われる。山道の整備や補修は政府環境局などの常雇いであるのに対してガイドは契約雇用の感がある。

ガイドには自然環境に対する幅広い学習、トレッキング経験、ファーストエイドの知識が要請される。

ガイドは仕事に誇りを持ち、賢明にこなしているひとびとが多いと思われた。

トイレのない場所で用足しするときにはリュックザックを山道に置くのが鉄則だ。荷物があるうちはひとが停滞しているからガイドは先に進むことはできない。常にトランシーバーで連絡をとり、緊急搬送が必要な場合はヘリコプターをも要請する。

ガイド付きトレッキングはミルフォードトラックが4泊5日で12万円、ルートバーントラックが2泊3日で8万円だった。

1泊3～4万円も支払うトレッキングは大名登山ともいえるが、申し込んで許可が下りるのに3カ月～半年かかることもあるというから絶大な人気を誇っているコースと言っていいだろう。世界中からトレッカーが集まってくる。多いのはオーストラリア、アメリカ、ヨーロッパ、日本、ニュージーランドの人々だ。

勿論、同じコースの個人ウオークもできる。ガイトウオークとは別の山小屋が用意されベッド（マット付き）、トイレ、台所は備え付けである。但し寝袋、コンロ、炊事用具、食材などは自身で調達し運んで行かなければならない。酒類、清涼飲料水などガイドウオークの小屋で買うことは出来ないから自己運搬だ。

ロッキー山脈は10人に1人、ミルフォードは40人に5人、ルートバーンは13人に3人のそれぞれガイドが付いた。問題は遭難の危険やサービス低下との向き合い方だろう。常にヘリコプターと連絡が取れる体勢や熟知されたコース設定が前提であれば発生しうる危険やサービス低下は防ぎ得るし、何よりトレッカーが自らの体調管理で怪我や病気の発生に対応する自覚と見識が問題だと思われた。

5) トレッキング条件整備と環境づくり

北海道の山に限らず、日本の人気のある山々は山道に側溝がなく雨が降ればトレイルが川になることが多い。高山性の花畑があり、固有種や貴重種があればロープで柵がつけられ時には監視人がいて罵声に似た大声で登山客を叱責することも珍しくない。営林署などに雇われた監視人と自然保護団体のメンバーが登山者のチェックを通じて対立することもある。監視人は役所の上司命令に従って登山客に注意するが、自然保護団体は自然を保護する思想から出来る限り固有種などを登山客に見せようとする。しっかりと実物を見て保護の心を育むか、固有種に近づけないようにするかの違いからだと思うが花や鳥の実態を記載し、写真を撮っている専門家を怒鳴りつける管理人の存在は山旅をするひとの尊厳を傷つける。

ニュージーランドでもアメリカ合衆国でも「立ち入り禁止」区域を設定し、「ロープを張った場所」は見かけない。危険な崖も含めて注意書きもないのが普通。自己責任方式が徹底している。

トレイルにゴミは落ちていない。これは山を歩くひとのマナーの問題だ。ゴミを落とせばお互いが注意し、落ちていたゴミは誰でも拾うことが習慣化しているのだ。

ニュージーランドの2つのトレイルを歩いた限りでは大半の山道は側溝があり、所々水切り横溝がトレイルを斜めに横切って掘られている。雨水がトラックを流れない仕組みが出来上がり、道幅も余程険しい山道を除いて2 m程度に確保されている。木橋や吊り橋の木部には必ず金網やゴムが敷き詰められていて滑らないように工夫されているし、吊り橋の手すり部分も網で覆い転落防止を心がけている。

急な滝や自然美の際だった場所は敢えて複雑な組立木橋をつくり美しい景観をトレッカーに見せる工夫を怠らない。

ニュージーランドには1900年代になって政府観光局が設立、国の観光政策としてトレッキングコースの整備を行ってから既に1世紀が経過している。山道の整備を地元の山岳会や観光協会に依存している日本とは大きく違い、国家の観光政策として山道の整備に取り組んできた。

トイレの存在も異なる。日本の山小屋はボタン（落下）方式で垂れ流しが一般的だ。最近では水洗や有機物を入れて汚物を分解させる方式を採用し始めた小屋もあるが少ない。

人通りが多い山道でロープが張り巡らされている場所ではトイレができない。ロープを越えれば用足し中でも監視人に呼び戻される。これは非人道的とも思われる行為だ。

ミルフォードトラックやルートバーントラックのトイレは各小屋には勿論、小屋のないコース上にも簡易トイレが設置され、汚物は処理されて空路ヘリコプターで処理場に運ばれる。また、小屋の配置をみると個人ウォーク用とガイドウォーク用が交互にあり、トイレの間隔がトレッカーの生理状況を考えて比較的短い間隔で設置されていることだ。

山小屋への食料運搬や小屋建築の資材運搬、小屋から出るゴミや排泄物（これは簡易処理し固形物にする）の運搬はすべてヘリコプターだ。ミルフォードトラックのクインテン小屋の前庭には数百mの小型飛行機用滑走路跡があるが今は使われていない。かつては小型飛行機が山小屋に物資を運ぶ輸送用機械だったのである。今日ではヘリが主体だから、ヘリポートの整備は進んでいる。救急搬送用も含めてクインズタウンやテアナウの街と山小屋は空路で結びついているといってもいい。

6) 観光行政の根幹になった DOC (Department of Conservation)

ルートバーントラックで同行したニュージーランド政府観光局の矢島節子マーケティング部長は観光局と DOC の役割を次のように説明する。

「ニュージーランド観光は、既に100年以上前の1901年2月に設立された政府観光局の果たす役割が高かったが、国家機関を統合整理して観光立国を目指すため1987年に自然保全省 (DOC) を設置した。

これまで国立公園と自然保存地の管理は土地測量局、森林公園と国有林は森林庁、野生動物は内務省、沿岸、海底、河川は運輸省、海洋保護・海洋動物は農業・漁業省とバラバラな管理体制にあったものを DOC に統括、一本化したのである。

その結果、国立公園や自然保存地で貴重な草木採取を禁止し、河川、湖でのフィッシングに量的制限を持ち込み、害獣駆除なども出来るようになった。

さらに20世紀末、国は観光振興戦略のため「100%ピュアニュージーランド」のブランディングキャンペーンを立ち上げ、政府観光局がイニシアチブをとってホテルや交通機関、アクティビティなどの旅行商品に品質保証を与えるシステムを導入したのである。一般にクオールマークとかクオールマークグリーン

と呼ばれている」。

たしかに外国からニュージーランドに入国し、観光旅行やレジャー、山岳スポーツなど行う場合、非常に便利なネットワークが出来上がっていて有効に機能していることに気づく。

オークランドやクライストチャーチ、ウェリントンやダニーデンなどの都市の中心部には勿論、中小都市、集落に至るまでツーリスト用インフォメーションセンターがあり、何人もの職員が対応している。この事務所は単にインフォメーション提供だけでなく観光客の要望に応じ航空券、汽車やバス、フェリーチケットの販売、ホテル探しや予約、旅のルート設定などを行っているが利用者は列をなしている場合が多い。

例えば日本でオークランドからクイーンズランドまでの往復航空券を購入すると正規料金で往復7万円請求されるが、このオフィスで同区間の往復格安航空券を買うと2万円程度で調達できる。宿で格安の物を探せと言えば即座に見つけて相談に乗りその場で発券する。日本語ガイドが必要な観光バスがいい、といえぱそれを探し出す。

こうしたツーリストに対する政府観光局のサービス対応は世界で最も進んでいるのではないか。日本人がよく利用するオフィスは、日本語が堪能なニュージーランド人や日本人職員が対応しているのだ。

日本でも交通機関の発券や宿の予約券を発行するエージェントはいくらでもあるが、国のインフォメーションセンターの形をとっていない。各観光交通会社が独自に対応しているのが普通である。

山のトレッキング予約や料金支払いも気に入った物件があればその場で精算してくれる。その情報はヴァウチャーがなくても先方に入信されるので問題ない。

例えば宿を予約し料金を払い込めば宿泊券が渡される。本人が宿のフロントで名前を告げれば宿泊券を見せると言わない場合が一般的になっている。情報が末端まで共有化されているのだ。

7) 外国の山旅環境に学ぶ

日本の山々の管理は、国土交通省、環境省、農水省（林野庁）など縦割り行政の中でそれぞれがおこなわれている。環境保護に関しても行政機関によって保護基準が異なっている。例えば、日本の自然保護地域は人の出入りをシャッ

トアウトして保全しようとする。

ニュージーランドやアメリカ合衆国は入山人数に制限を加えながら自然と共生していく。自然と人が触れあわない環境保護よりも多少の管理制限をしながらも楽しみを後世まで残そうとする「保全」の考え方が浸透しているのだ。

日本でも自然保護団体などでは、見て触れて歩いて環境に優しい心を醸成することが先決とする考え方をとり、政府機関末端の禁止区域に縄や柵を張り巡らし、人を寄せ付けない保護方式と衝突することもしばしば見受けられる。

高山植物で貴重種の盗掘や踏み荒らしが自然破壊をもたらすのは登山者、ハイカー、トレッカーの自然と向かい合うヒトのこころや道德の問題であり、規制すれば無くなるとは思えない。

アメリカ合衆国には、広大な Wilderness Area（自然保護区域）が数多く見られる。国立公園に準ずる指定区のようなのだが、国立公園ほど規制が厳しくない。自然保護団体のなかには、このウイルダネスエリアが国立公園や自然遺産に昇格、指定されることを好まないグループもある。現状のままで十分自然保護は可能であるし、むしろ規制の少ない状況こそ自然との共生が楽しいと思われるからだ。

日本の山に多い看板に「禁止」、「危険」、「注意」などが多い。外国では滅多に見ない看板や立て札だ。無いわけではないが目立たない。山頂を表す標識も見つけることは難しい。迷いやすいトレイルに方向指示標識がある程度で、どうしても必要な避難小屋、時には山小屋、トイレを除いて基本的に構造物は建てないのが原則だ。

ニュージーランドのミルフォードトラックやルートバーントラックは人数制限があるとはいえトレッカーが多いから山小屋やトイレが建設された。ワイオミングロッキーで構造物と言えば方向指示標識と1カ所鉄製の熊よけ食糧貯蔵コンテナだけだった。

日本の山岳地帯で問題になっているのは散らかるゴミと便の処理（トイレ）問題。山頂付近には通称「糞場」があって汚物や落とし紙が散らかっている。特に、富士山のゴミ問題は深刻だ。

ニュージーランドやアメリカ合衆国は園芸用の小スコップで穴を掘り、排便した汚物には必ず土をかける。落とし紙は必ずビニール袋に入れて持ち帰る。慣れてしまえばごく当たり前のこと。

さらに重要なことは、自然保護区など立入禁止、入山禁止にするのではなく、

人数に制限を設け、立ち入りを許しながら長期的に植物や鳥獣保護の思想を育んで行く発想が欲しいものである。

夕張岳の経験も参考になる。この山は希少種、固有種が日本で最も多い53種におよび盗掘が絶えなかった。地元の自然保護団体「ユウバリコザクラの会」は夕張岳の高山植物を天然記念物に指定することに成功した。1996年のことである。こうして固有種は文化財となる。文化財を盗れば立派な犯罪だ。法務省、環境省、林野庁にも働きかけ固有種を護る運動を展開した。護る思想は、高山植物を観て、愛でて、触れて末永く育む考え方に立つ。しかし、行政官庁は「文化財に指定されたから盗られないことになっています」とか、盗掘調査で山に登るのが億劫なのか、監視員を増やす程度で「環境保護の思想」を普及するような状況にはなかなかならない。

まだまだ日本の山旅文化は外国に学ぶところが多いのではないか。

参考文献

野田知佑・滑田広志・鎌倉文也『ニュージーランドの自然を楽しむ本』河出書房新社 2001年12月

滑田広志『ニュージーランド・ハイキング案内』山と溪谷社 1998年3月

植村善博『図説ニュージーランド・アメリカ比較地誌』ナカニシヤ出版 2004年6月

日本ニュージーランド学会『ニュージーランド入門』慶應義塾大学出版会 2004年4月

井田仁康『ラブリー・ニュージーランド＝自然と人間の生活』二宮書店 1996年4月

久村研『オーストラリアとニュージーランド』三修社 2001年8月

進藤賢一「景観地理学アオテアロア」『札幌大学総合論叢』第18号 2004, 10
Person Education『Atlas Aotearoa』2001

David Bateman『Contemporary Atlas Newzealand=The Shape of Our Nation』1999

Ultimate Hikes『Milford Truck/Routeburn Truck Grand Travers Navigator』2009,2

Earthwalk Press『South WindRiver Range=Hiking Map of Guide』2009

Melinda Goodwater『Bears Ears-Cirque of The Towers Loop Wind River Range,Wyoming』16-23,2009